

根 来 寺 坊 院 跡

昭和59年度

和歌山県教育委員会

例 言

1. 本書は、国庫補助事業、昭和59年度根来寺坊院跡発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は、社団法人和歌山県文化財研究会に委託し、実施した。
3. 本書の遺構写真は窪田雅秀、村田弘、辻林浩が、遺物写真は窪田、辻林が撮影した。
4. 遺物の実測、トレースは窪田、村田、辻林があたり、遺構のトレースには窪田があたった。
5. 本書の作成には、味村万喜子、上野道代、岩鶴裕香里、大谷登詩、小倉由起子が協力し、村田、辻林が執筆・編集した。
6. 本書の遺物実測と遺物図版に付した番号は一致する。ただし、遺物図版にある4桁の数字を付したものは、写真だけである。

調 査 組 織

調査委員

- 羯磨 正信 (和歌山県文化財保護審議会委員)
巽 三郎 ()
都出比呂志 ()
藤沢 一夫 ()

調査員

- 辻林 浩 (和歌山県教育庁文化財課主査)
村田 弘 (社団法人和歌山県文化財研究会技術員)

調査補助員

- 窪田 雅秀

- 事務局理事 鍋島伊津夫 (和歌山県教育庁文化財課課長)
局長 伊藤 正也
次長 北野 全美 (和歌山県教育庁文化財課主幹)
梅村 善行 (課長補佐)
幹事 桃野 真晃 (第2係長)
主任技術員 松田 正昭 (主査)
書記 今田 一里 (主事)

目 次

<p>I 調査…………… 1</p> <p>II 遺 構…………… 2</p> <p>1. 第1次調査区の遺構…………… 2</p> <p> a. 上層の遺構…………… 2</p> <p> b. 中層の遺構…………… 2</p> <p> c. 下層の遺構…………… 8</p> <p>2. 第2次調査区の遺構…………… 10</p> <p> a. 江戸時代の遺構…………… 10</p> <p> b. 室町時代の遺構…………… 19</p> <p>3. 第3次調査区の遺構…………… 21</p> <p>III 遺 物…………… 23</p> <p>1. 第1次調査区の遺物…………… 23</p> <p> a. 表土・床土出土の遺物…………… 23</p> <p> b. 第1層出土の遺物…………… 23</p>	<p> c. 第2層出土の遺物…………… 23</p> <p> d. 第3層出土の遺物…………… 23</p> <p> e. 第4層出土の遺物…………… 24</p> <p> f. 第5層出土の遺物…………… 24</p> <p> g. 第7層出土の遺物…………… 25</p> <p> h. 第8層出土の遺物…………… 25</p> <p> i. 遺構出土の遺物…………… 25</p> <p>2. 第2次調査区の遺物…………… 27</p> <p> a. 表土・床土出土の遺物…………… 27</p> <p> b. 遺構出土の遺物…………… 27</p> <p>3. 第3次調査区の遺物…………… 33</p> <p> a. 包含層出土の遺物…………… 33</p> <p> b. 遺構出土の遺物…………… 34</p>
--	---

図 目 次

<p>第1図 遺跡の範囲</p> <p>第2図 山内地形図</p> <p>第3図 NG84-1次遺構平面図</p> <p>第4図 NG84-1次層位模式図</p> <p>第5図 ◇ 埋桶-02実測図</p> <p>第6図 ◇ SE-01実測図</p> <p>第7図 ◇ SX-01実測図</p> <p>第8図 NG84-2次遺構平面図</p> <p>第9図 ◇ SE-01実測図</p> <p>第10図 ◇ 埋甕-02実測図</p> <p>第11図 ◇ SG-01実測図</p> <p>第12図 ◇ 瓦列実測図</p> <p>第13図 ◇ 瓦列瓦実測図</p> <p>第14図 ◇ SX-01実測図</p>	<p>第15図 NG84-3次遺構平面図</p> <p>第16図 ◇ 埋甕・手水鉢実測図</p> <p>第17図 ◇ 甕実測図</p> <p>図1 NG84-1次包含層出土遺物実測図</p> <p>図2 ◇ ◇</p> <p>図3 ◇ ◇</p> <p>図4 ◇ ◇</p> <p>図5 NG84-1次包含層出土遺物実測図 ◇ 遺構出土遺物実測図</p> <p>図6 NG84-1次遺構出土遺物実測図</p> <p>図7 ◇ ◇</p> <p>図8 ◇ ◇</p> <p>図9 ◇ ◇</p> <p>図10 NG84-2次包含層出土遺物実測図</p>
---	---

図10 N G 84—2 次遺構出土遺物実測図
 図11 ♪ ♪
 図12 ♪ ♪
 図13 ♪ ♪
 図14 ♪ ♪
 図15 ♪ ♪
 図16 ♪ ♪
 図17 ♪ ♪

図18 N G 84—2 次遺構出土遺物実測図
 図19 ♪ ♪
 図20 ♪ ♪
 図21 ♪ ♪
 図22 N G 84—3 次包含層出土遺物実測図
 図23 ♪ ♪
 図24 ♪ 包含層出土遺物実測図
 図25 ♪ 遺構出土遺物実測図

図 版 目 次

図版 1	1	1 次	上層全景 (北から)	4	2 次	竹樋—01 (西から)
	2	♪	S E—01 (南から)	5	♪	石列 (北から)
図版 2	1	♪	中層全景 (南から)	6	♪	石列 (西から)
	2	♪	中層全景 (北から)	図版10	1	♪ ウメガメ—02 (北から)
図版 3	1	♪	S X—01 (南から)	2	♪	ウメガメ—02断面 (東から)
	2	♪	下層全景 (南から)	3	♪	S X—01 (南から)
図版 4	1	2 次	西半部北側全景 (南から)	4	♪	S X—03・04 (北から)
	2	♪	西半部北側全景 (東から)	5	♪	瓦列 (南から)
図版 5	1	♪	西半部南側全景 (北から)	6	♪	瓦列立面 (南から)
	2	♪	西半部南側全景 (東から)	図版11	1	3 次
図版 6	1	♪	東半部北側全景 (南から)	2	♪	上層南半部全景 (南から)
	2	♪	東半部北側全景 (西から)	3	♪	上層東半部 (南から)
図版 7	1	♪	東半部南側全景 (北から)	4	♪	手水鉢・埋壘検出状況 (東から)
	2	♪	東半部南側全景 (西から)	5	♪	S F—01 (北から)
図版 8	1	2 次	S E—01・S D—02 (西から)	6	♪	下層全景 (南から)
	2	2 次	S E—01・S D—02・ S D—03 (東から)	図版12	1 次	包含層出土遺物
図版 9	1	2 次	S G—01 (西から)	図版13	♪	♪
	2	2 次	S X—02 (北から)	図版14	♪	♪
	3	2 次	埋桶—02 (北から)	図版15	♪	♪
				図版16	♪	♪

- | | | | | | |
|------|----|---|------|----|--------------------------------------|
| 図版17 | 1次 | 包含層出土遺物 | 図版39 | 3次 | 包含層出土遺物 |
| 図版18 | ✧ | 包含層出土遺物・遺構出土遺物
(S D-05) | 図版40 | ✧ | 包含層出土遺物 |
| 図版19 | ✧ | 遺構出土遺物 (S D-05・09・
S V-01・S K-01) | 図版41 | ✧ | 包含層出土遺物・遺構出土遺物
(S D-01・S K-04・05) |
| 図版20 | ✧ | 遺構出土遺物
(S K-01・03・07) | 図版42 | ✧ | 遺構出土遺物
(S K-10・11・甕・手水鉢) |
| 図版21 | ✧ | 遺構出土遺物 (S E-01) | | | |
| 図版22 | 2次 | 包含層出土遺物 | | | |
| 図版23 | ✧ | 包含層出土遺物・遺構出土遺物
(S K-05) | | | |
| 図版24 | ✧ | 遺構出土遺物 (S K-05) | | | |
| 図版25 | ✧ | 遺構出土遺物 (S K-05・06) | | | |
| 図版26 | ✧ | 遺構出土遺物 (S K-09・10) | | | |
| 図版27 | ✧ | 遺構出土遺物 (S K-10) | | | |
| 図版28 | ✧ | 遺構出土遺物
(S K-10・11・12) | | | |
| 図版29 | ✧ | 遺構出土遺物
(S K-14・15・16) | | | |
| 図版30 | ✧ | 遺構出土遺物
(S K-18・19・20) | | | |
| 図版31 | ✧ | 遺構出土遺物
(S K-32・36・S G-01) | | | |
| 図版32 | ✧ | 遺構出土遺物 (S G-01) | | | |
| 図版33 | ✧ | 遺構出土遺物 (S G-01) | | | |
| 図版34 | ✧ | 遺構出土遺物 (S G-01) | | | |
| 図版35 | ✧ | 遺構出土遺物 (S D-03・04・
S X-01・S E-01・ウメガメ
-01・02・瓦列瓦) | | | |
| 図版36 | ✧ | 遺構出土遺物 (S E-01) | | | |
| 図版37 | ✧ | 遺構出土遺物 (S G-01) | | | |
| 図版38 | 3次 | 包含層出土遺物 | | | |

I 調査

本年度は、山内2ヵ所、山外の町屋部分1ヵ所の計3ヵ所の調査を実施した。

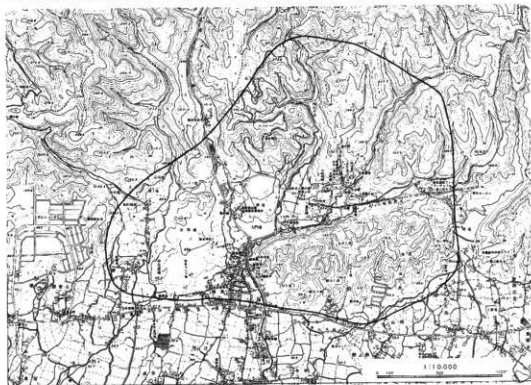
山内の南北に伸びる谷のうち最も大きな谷であり、秀吉の根来攻めの際に侵入路となったとされている桃坂谷(蓮華谷)に設定した第1次、第2次調査区は、岩出町が計画している農業整備事業に対処する資料を得るためのものである。また、山外に計画した第3次調査区は、農業用倉庫建設工事に伴うものである。

第1次調査区は、現根来寺本坊の西側に張り出した尾根斜面を造成した、南北に細長い水田である。本来は、東側にある一段高い水田と合せ、一区画を形成していたものと考えられる。

第2次調査区は、桃坂谷を南流する蓮華谷川が、東側尾根裾から西側尾根裾へと流路を転換する地点の北側に位置し、谷奥部では最大の敷地をもつ区画である。

第3次調査区は、根来川と洞尾川とに挟まれた台地上に位置し、昭和56年度に紀の川用水建設工事に伴い発掘調査を実施し、根来塗桶多数や漆塗用刷毛が出土し、工房跡ではないかとされている地点の西南に位置する。

3地区とも江戸期に大規模な整地を受けており、天正の兵火に係る時期の遺構は皆無に等しい。しかし、第1次調査区では、15世紀あるいはそれ以前の遺構の残存状態は良好であった。



第1図 遺跡の範囲

II 遺構

1 第1次調査区の遺構

調査区は南北に伸びる谷筋に位置し、現地形は水田となっている。このため当初遺構の残存状態は良いものと考えられたが、江戸時代の塔頭寺院の敷地整地時にかなりの削平を受けており、天正の兵火時にかかる遺構としては、溝一条を検出したにとどまった。ただし江戸時代の遺構及び兵火時にかかる以前の遺構の残りは良好であった。

遺構は上層から下層まで、都合三面を数える。

a 上層遺構

床土下、厚さ5cmほどの焼土層を除去した後の面で、検出した主な遺構としては、溝・土壇・井戸などがある。

S E—01 径1.0m、深さ5.5mを計る江戸時代の井戸である。基底部には4個の大きな石を敷き、その上に20～50cm大の石を用いて堅固な積みを行っている。この時期の井戸の通例として、ほぼ垂直なつくりをなし、井戸中よりは近世の陶磁器片や瓦などとともに礫石が投げ捨てられた状態で出土している。

S D—01 幅50cm、深さ20cm前後をはかる溝で、一部に割石による積みが残っている。

S D—05 調査区を南北にS字状に蛇行する溝で、幅60～90cm、深さ15～20cmをはかる。天正の兵火時にかかるものである。おそらく当初はかなりの深さを有する素掘りのU字溝であったものが江戸時代の削平によって、底部のみ残ったものと考えられる。覆土上層は炭まじりの焼土層、下層は灰色の砂質土である。遺物には兵火直前のももの含まれるが、むしろそれより一時期古い様相を呈し、溝としての存続期間の長かったことをうかがわせる。

S K—01及びS K—03はともに1m以上をはかる楕円形の土壇である。覆土は水分を多く含んだ灰色土で、伊万里・唐津などの碗皿が出土している。

埋桶—01 図5に示すように小判形の桶である。江戸時代のもので便所として使用されたものである。

その他、S K—07・08などの土壇、大小のピットを検出したが、いずれもS D—05をのぞけば近世の遺構であり、出土遺物からこの面に営まれた塔頭寺院の建立は江戸時代、17世紀中葉以降のことであると判断される。

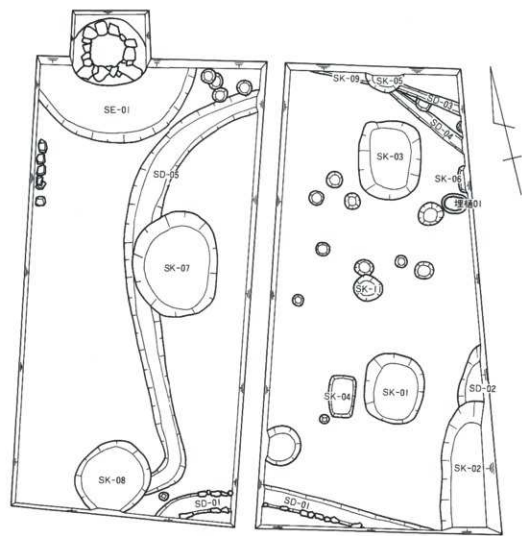
b 中層遺構

S V—01は10～20cm大の割石を用いた乱石積みの石垣である。東側は前述のS D—05によって切られる。西側ではほぼ直角に折れ曲がり(S V—02)調査区外へと伸びる。

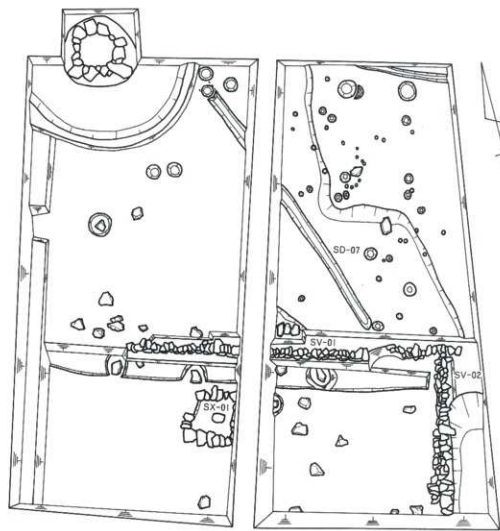
S X—01 大小の石によって囲まれた一辺1.3mほどの方形の遺構である。深さは20cmほどで



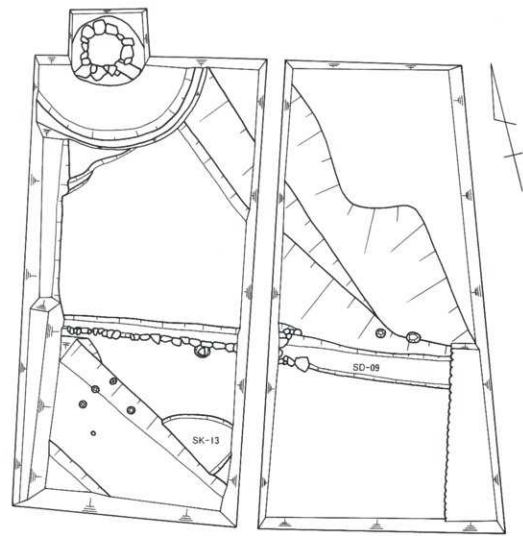
第2図 山内地形図



上層



中層

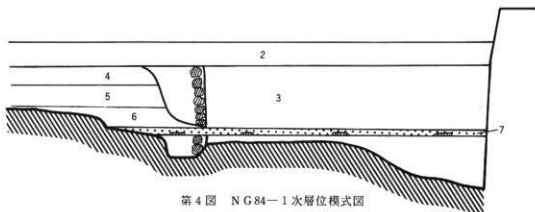


下層

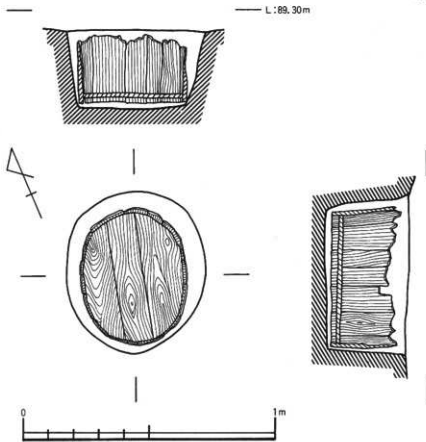


石のツラは内面にある。カマド、もしくはそれに類する遺構と思われるが底部及び覆土にも炭、焼土は見当たらない。

その他、この面上では石垣で画された調査区南半に幾つかの石が点在して検出された。本来、建物の礎石となるものであろうが、持ち去られたものもいくつかあるようで現状では建物の復原は困難である。また石垣の北側では杭跡と思われる径5~10cmの小ピット、建物に関連したと思

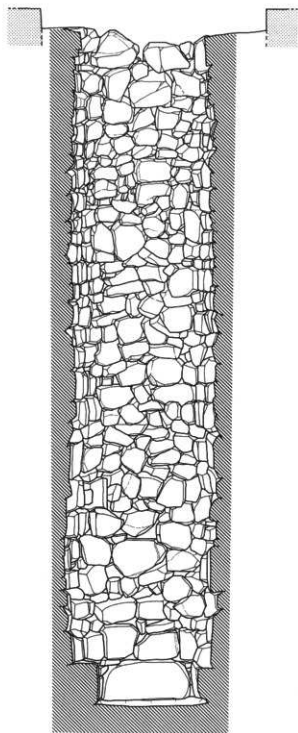


第4図 NG84-1 次層位模式図



第5図 NG84-1 次埋桶-02実測図

L:90.20m



第6図 NG84-1次SE-01実測図

われるピットが点在する。

以上の遺構は、いずれも兵火以前の遺構であり整地による遺構面である。整地は数時期にわたって行なわれたものと思われ、各整地層出土の遺物には時期差が認められる。

第4図はこれらの整地層及び遺構を模式図化したもので、出土遺物よりそれぞれ2層を14C末から15C初頭、3層を14C中～後、7層を13C末、最終8層を13C後半のものとして判断している。

c 下層遺構

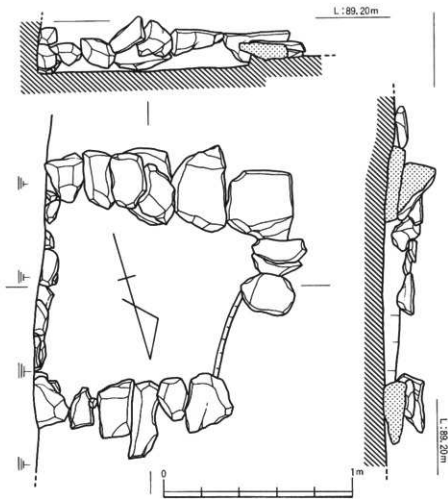
SD-09は幅30cm、深さ20cmほどの溝で、北側は地山を垂直に切って肩となすが、南側の肩には10～30cmほどの割石を用いている。

溝の方向、位置とも中層の石垣(SV-01)と同じくしており、この地点及び方向が何らかの規定ないしは意味をもつことが考えられよう。

SK-13は不整形の土壌で深さ5cm程度。覆土には炭がまじる。13C後半代の瓦器小片が出土している。

なお、地山は黄茶色のよくひきしまった山土で、調査区の北東から西南にかけて緩やかな傾斜をなしており、本調査区の旧地形が尾根の斜面であったことが判明した。

以上が今次の調査の概要であるが、先にも述べたように天正の兵火時にかかる遺構は江戸時代の削平によりとばされており、この期の塔頭跡を確認するには至



第7図 NG84-1次SX-01実測図

らなかった。また兵火以前及び江戸時代の遺構についても建物跡を含め、具体的な塔頭の構成を把握するには至らなかった。おそらく建物等の主要遺構は東側の隣接する水田に広がっていくものとする。

一般に山内においては現在の水田、畑の畦畔が往時の区画を踏襲するのが通例とされているが本例ではその限りでない。

なお今回の調査では整地層より13C代の遺物がプライマリーなかたちで出土しており、11C末～13Cに空白域を設定する山内ではやや異質な出土状況を呈している。今後の発掘調査及びそれによる資料の増加を待たなければいけないが、あるいはこの時期に規模を縮小しながらもいくつかの坊舎が営まれていたという可能性も考えられようし、そのさい1288年というメルクマールとなる実年代の設定をも含めて再考の必要が生じるものとする。今後の継続的な調査による詳細な追求が望まれよう。

2 第2次調査区の遺構

発掘調査は、水田1枚を対象としたため、土置場が必要なため南北に2分して実施した。

すべての遺構は、床土除去後同一面で検出されたため遺構内出土の遺物により時期決定したが、天正の兵火時にかかる時期のものが2、3残存していたにすぎない。天正の兵火後の復興時の敷地造成がかなり大がかりなものであったことを示している。

a 江戸時代の遺構 (第8図)

検出遺構には、溝(SD-01~04、06~09)、土壌(SK-01~31、33~35、37)、備前大甕を埋めた井戸(SE-01)、竪穴式石室状遺構(SX-01)、敷石遺構(SX-02)、カマド状遺構(SX-03・04)、中島をもつ池(SG-01)、埋甕、埋桶、瓦列、石列などがある。しかし、これらすべてが同時期というわけではなく、2時期あるいは3時期の存在が考えられる。

溝のうちSD-04は、掘り方に節を抜いた竹が入れられており、溝というよりはSE-01への導水用の竹樋ではないかと考えられる。

SD-02・03・09は、SE-01からの排水溝であり、SD-09→SD-03→SD-02という順に造られている。SD-02はSE-01の近くで分岐しているが、北側の方が新しく造られたものである。SD-06・08は東方が削平のため消失している。SD-07も北方が削平のため消失しているが、現存部分の北端に埴2枚を立て一辺とした小さな溜槽が造られている。

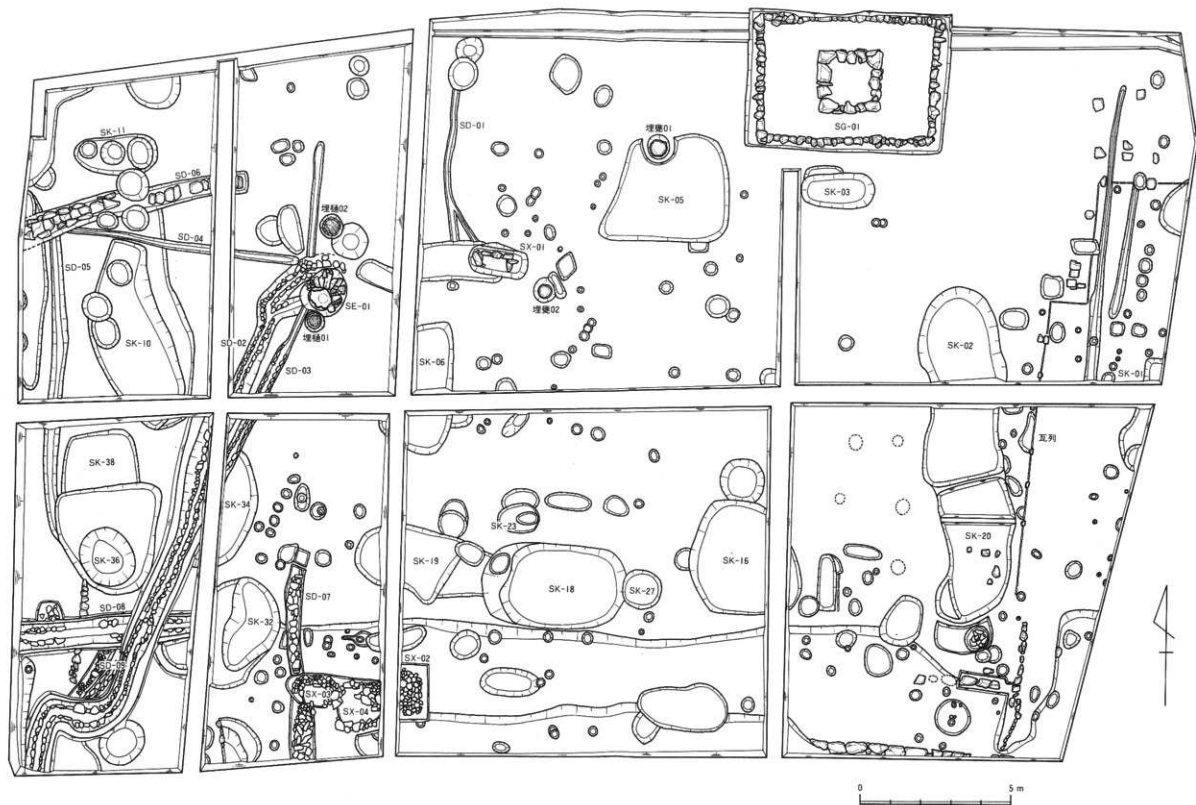
土壌のうちSK-16・18・19は、内部に石を投げ込んだものである。前代の不用になった石材を投棄するために掘られた穴と考えられる。SK-05・10も同様のものであろう。

SK-11は、掘り方内に3基の大形ピットを有するが、掘り方外南側にあるJ形に並ぶ3基の大形ピットと合せ、甕ピットになる可能性がある。

SK-02・06はともに焼土で埋っていたが、江戸期の火災後の焼跡整理用に掘られたものであろう。SK-06には瓦が多量に投棄されていた。

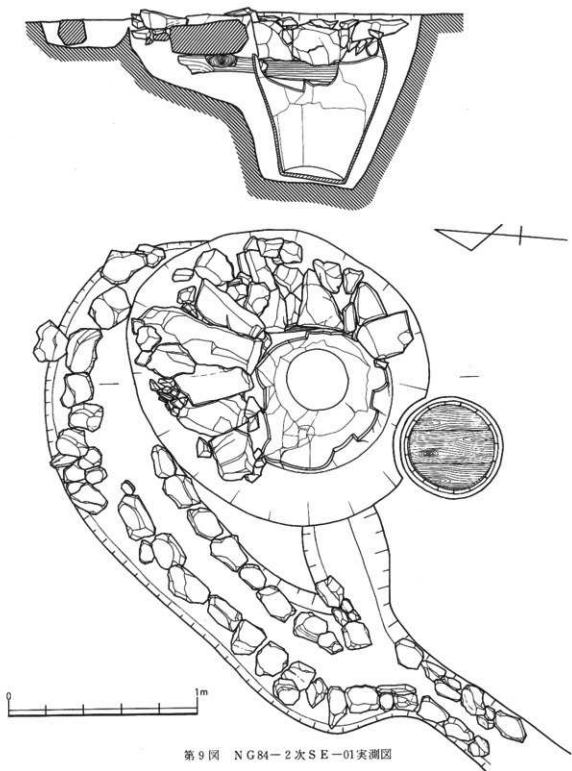
井戸(SE-01、第9図) 二石入り備前大甕を埋め込んで造られたもので、頸部から上方は欠失している。甕は長径約1.7m、短径約1.5mの掘り方内に据えられており、北側と東側に十字に組まれた径10~14cmの丸太で固定されていた。2本の丸太は、それぞれの一方に切られた溝で組み合わせられており、甕の傾くのを防ぐと同時に、開口部に敷いた流し場と思われる石材の沈下をも防いでいる。流し場と思われる石敷は木組の上だけに限られており、大形の割石が使用されており、合せ目の間隙には小さな割石で充填され平坦にされている。

竪穴式石室状遺構(SX-01、第14図) 長辺約2m、短辺約0.9mの方形の土壌内に、内法で長辺約0.8m、短辺約0.3mの竪穴式石室状の石積みがおこなわれている。石積みの南辺は失われているが、西辺とも2~3段の石積みがおこなわれていたようである。なお、北辺の一段目は、板碑を構に寝かせて使用している。



第8图 NG84—2次遺構平面図

L:104.00m



第9图 NG84-2次SE-01实测图

敷石遺構 (SX-02) 西半がセクションベルトの下になるため全容は明らかでないが、長辺約1.5m、短辺約1mの長方形を呈すると思われる。その性格については不明である。

カマド状遺構 (SX-03・04) SX-04の方が新しく、SX-03の東端部を積み変えてSX-04が造られている。SX-03は径約0.6m、SX-04は径約1.1mを測る。

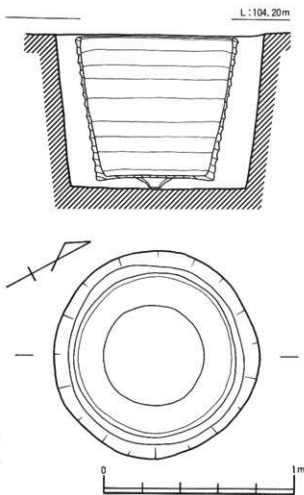
池 (SG-01、第11図) 調査区北東隅で検出した。長辺約6.5m、短辺約4.7mを測る掘り方内に築造されたもので、長方形を呈し、中には方形の島が造られている。

池の四辺は石を積み上げ護岸としている。東辺を除く西辺、北辺、南辺には、径15cm~20cmの松丸太を胴木として置き、その上に石が積み上げられている。また、胴木が前方に迫り出さないように小さな割石がかまされている。東辺だけが地山

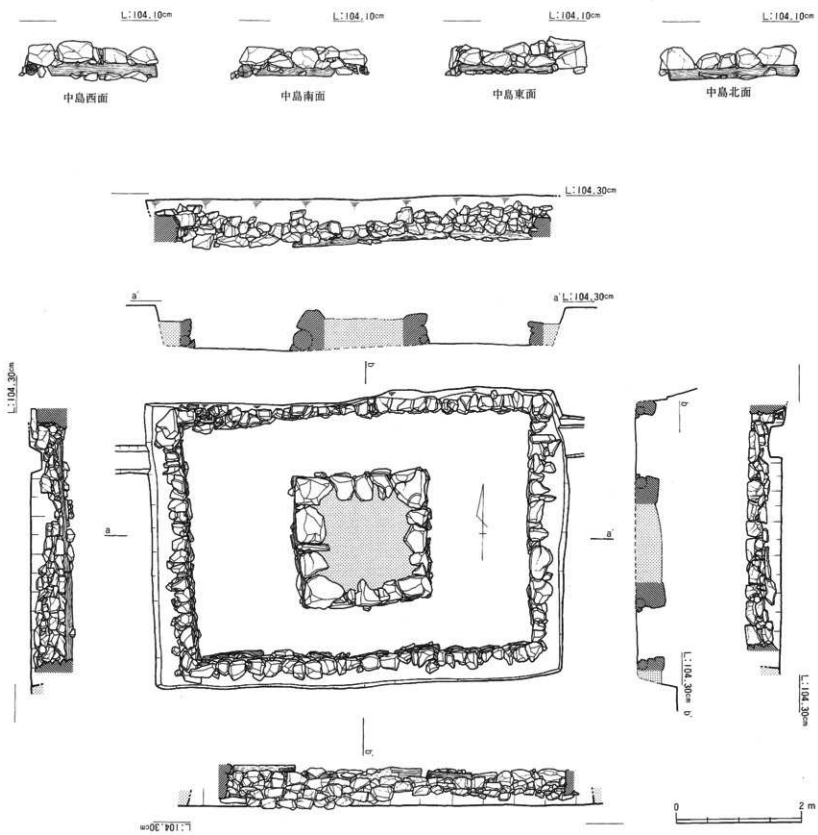
上に直に石が積まれている。一方、中に造られた島は一辺約2.1mを測り、池の三辺同様に胴木の上に石が積まれているが、石材が大振りなせいか胴木も太いものが使用されている。この島には、おそらく弁財天が南面して祀られていたものと思われる。当初は南辺に橋が架けられていたと考えられるが、後にはこの部分を埋め、島と対岸がつながった状態になっていた。

埴壇-01 SX-01は底部から上方約30cmを残した状態で遺存していた。口縁部および体部の破片がSG-01の西側部分に投棄されていた。これらを総合してみると、備前の大形の水屋埴壇の器形になる。口縁は体部から「く」の字状に開き、先端は折り返し玉縁状になる。体部はロクロ成形を思わせる幅の広い凹縁が回り、肩部には環状の粘土紐を貼り付け、指で押えることにより縄目の感じを出そうとした双耳をもつ。体部中央近くに断面三角形の貼り付け凸帯が巡る。内外面とも泥粧が刷毛塗りされている。

埴壇-02 (第10図) 径約0.6m、深さ約0.4mの掘り方内に、ほぼ直立した状態で据えられて

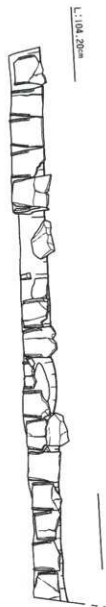
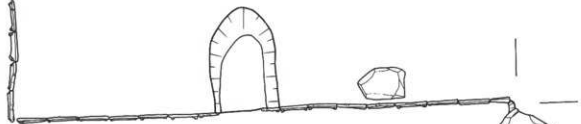
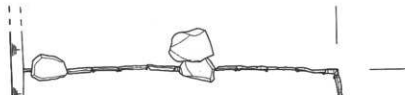
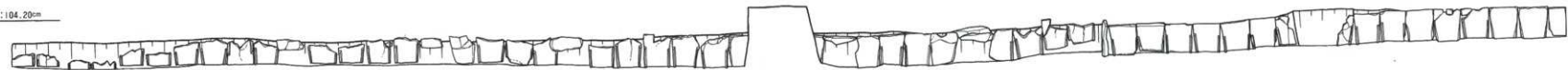


第10図 NG84-2次埋壘-02実測図



第11図 NG84-2次SG-01実測図

L: 104.20m



第12图 NG84—2次瓦列实测图

いた。

埋桶—01 SE—01の掘り方を切り込んで造られたもので径 0.7m と小形である。遺存状態が悪く、底板と側板の下部が多少残っていただけである。底は3枚の板を竹釘で接合したものである。

埋桶—02 径約 0.8m と埋桶—01に比べ大形である。埋桶—01同様遺存状態が悪く、底板と側板の下部が多少残っていただけであるが、外面底近くに3本の竹を編んだ籠が残っていた。底の作りは、埋桶—01と同じである。

瓦列 (第12図) 調査区東端部分で検出したもので、3回のほぼ直角に近い屈曲がみられ、その東端は調査区外へ出てしまう。また、南端部分は調査区南北長の約3分の1の所で消滅する。これは後世の地形改変により消失したものではなく、当初からこの部分で終わっていたものと思われる。瓦は、遺構面を「U」字状に掘り込んだ幅の狭い溝状の掘り方内に、水切りのついた部分を下方にして立てられていた。瓦列には約 1.2m の間隔を置いて小さな礎石が置かれていることから、当初から瓦列は一段だけであったことが知られる。瓦は塀用のものを転用したと考えられ、上部約 2cm程に2次焼成が認められるところから、当初はこれぐらいが地表から頭を出していたと思われる。

石列 瓦列の南側に南北に走るものと、この石列の中間から西に延びるものと、調査区東南隅

から西に延びるものとの3列を検出した。

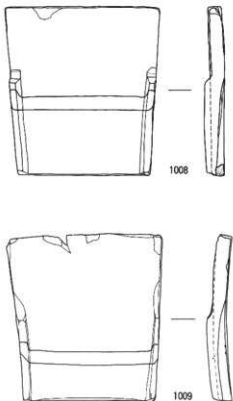
調査区東南隅から西に延びる石列は、大形の石を使用しており、面は調査区内に面している。おそらく築地塀用の石列ではないかと思われる。瓦列の南端近くから南に延びる石列は、その中間から石および置き方に差異があるところから、南半部分は後の所産と思われる。

b 室町時代の遺構

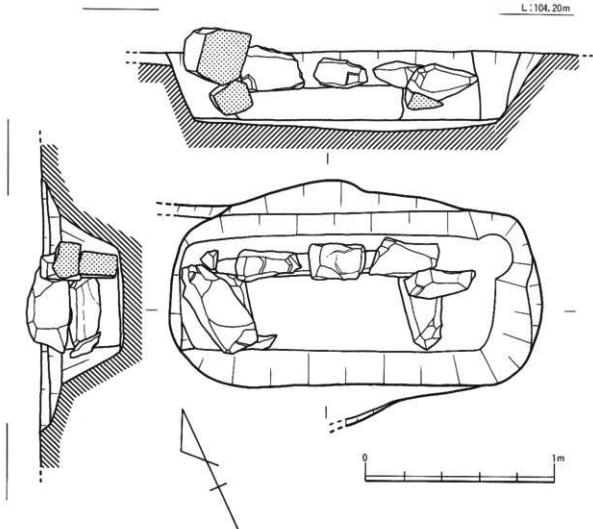
検出遺構は少なく、僅かに土壇3基 (SK—32・36・38) と溝1条 (SD—05) を計るだけで、往時の姿を偲ぶことはとてもできない。

SK—32・36・38とも不整形の落ち込みで、その性格は不明である。

SD—05 北端はSD—06により切られており、南端はSK—36に流れ込むように掘られている。出土遺物は根来寺通有の土師質小皿の小



第13図 NG84—2次瓦列瓦実測図



第14図 NG84-2次SX-01実測図

破が出土しているだけである。

以上のように、江戸期の遺構には前例をみないものも含め多種多様な遺構を検出したが、天正の兵火時にかかる遺構あるいはそれ以前の遺構の検出は皆無にひとしい。しかしながら、15世紀～16世紀の遺物がかなり出土していることから、本来この区画にも当該時期の塔頭寺院が存在したであろうことは十分に推察することができる。

一方、江戸期に関しては、これまでに例をみない瓦列や埋甕の井戸、池といった遺構を検出することができ、近世根来寺の姿の一端を窺うことができた。

3 第3次調査区の遺構

調査区は県道和泉佐野岩出線（根来街道）の西側およそ50mにあり、現在の民家の建ち並ぶ北端にあたる。調査地の現地地形は北側は農道をはきんで密柑畑、西側は畑地である。南側の民家とは比高差は2mほど、また北側の密柑畑とは1mほどの比高差であり、北から南へかなりの傾斜が認められる。また東側及び西側へも緩やかスロープをもち、当地区は緩やかな尾根筋にあたっている。一般に根来寺山内の遺跡が谷筋に沿って展開することを考えれば当地ではやや立地条件を異にしているといえよう。なお調査にあたっては前章で述べたように昭和56年度に実施された紀の川用水路建設に伴う発掘調査の結果を参考とした。

設定した調査区は東西7m、南北18mのおよそ126㎡である。近現代の盛土は厚く1mほどである。この盛土、さらにその下層の旧耕土を除去した結果、調査区中央付近で東西にのびる石垣

(SV-01)を検出した。

この石垣を境とする北側は5～20cm大の河原石を多く含む砂礫層で、遺構・遺物の検出は全く認められない状況であった。

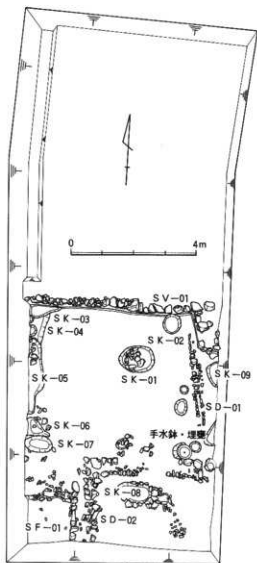
石垣南側では石垣の検出面から基底部までのおよそ40cmが包含層で、この層中よりは江戸時代後期の遺物を中心に室町時代の遺物が混在したかたちで出土している。

この包含層下で石組みの溝、土壌、タメマス状遺構等を検出した。以下、それらの中で主な遺構についてのみ簡単に記す。

SV-01は調査区中央を東西方向に走る石垣。調査区東隅でコーナーをもち南側へと曲がるようであるがこの部分は明確ではない。全体に石の積みは粗雑である。

SD-01 石組みの溝である。蓋石は一部分のみ残る。幅15cm、深さ10cm程の小規模なもので、おそらく日常生活排水に使用されたものとする。方向は前述の石垣の南側へ伸びる方向とほぼ一致しており、後述する手水鉢・埋甕へと向う。

手水鉢・埋甕遺構図17で示すように近接して手水鉢と思われる石製の鉢と埋甕（図版42-1027、



第15図 NG84-3次遺構平面図

1028) を検出した。これらをつなぐように敷石が並び、またこれら3点が同一レベルにあることからセットを成す遺構と判断したが用途は不明である。

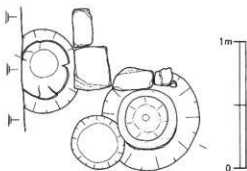
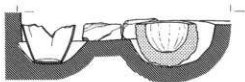
S F-01 調査区南東隅で検出したタメマス状遺構である。確認規模で1.4×1.6mを計る。周囲は一段の石によって囲まれ、深さ20cm内外である。覆土は暗黒色のシルト質の土である。

S K-01 1.1m×0.8mの楕円形の土壇で下層には10~20cm大の石が入る。土壇内より唐津の盤(333)伊万里の皿(332)などが出土している。

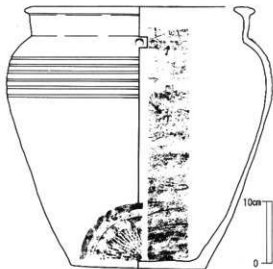
その他いくつかの土壇、不明確ながら石列と思われるものも検出しているが、前述の遺構も含めていずれも近世以降の遺構である。

先に述べたように当調査区は昭和56年度に実施された紀の川用水関連の発掘において、中世の遺物・遺構が検出された地区に近接しており、当然、当調査区にも及ぶものと考えられていたが調査の結果は予想に反しすべて近世以降のものであった。ただ包含層中には室町時代後半(15C~16C)の遺物が混在しておりこの地にも町屋の展開がなされたことをうかがわせる。おそらく中世の遺構は江戸時代初期以降の復興の過程で大規模な削平を受けたものとする。

なお根来寺の復興は17世紀に入ってからで、その盛時は元禄一宝永期(1688-1711)であったとされる。町屋の再建はこれらに先がけてはじまったことが既往の調査で確認されているが今回の調査ではこれをさらに裏づける資料を得るには至らなかった。ただ17世紀以降の遺物は多く、中世同様、近世においても町屋の展開は山内の規模拡大の時期とほぼ軌を一にしているものと思われ、言い替えれば門前町的性格が依然として続いていたことが同われると言えよう。



第16図 N G 84-3 次埋襲・手水鉢実測図



第17図 N G 84-3 次襲実測図

Ⅲ 遺物

1. 第1次調査区の遺物

a 表土・床土出土の遺物 (図1-1~12、図版12)

(1)は白磁四耳壺の口縁部である。軸調はやや青味をもつ。(2)伊万里の碗で体部に草花文、高台部に二重の圏線を巡らす。(3)は唐津の碗で無軸、茶褐色を呈す。(4・5)は美濃瀬戸系天目茶碗。(6・7)は東播系の須恵質こね鉢でともに灰色を呈し、ナデ調整。(8)は瓦質のこね鉢、口縁部はナデ、体部外面は横方向の粗いヘラ削り。胎土に少量の砂粒を含む。

(9)は備前のすり鉢で口縁端部を斜めに平坦に切る。備前焼編年Ⅱ期ないしⅢa期のもので当遺跡で出土する備前の製品の中では最も古い部類に属するものである。土師質皿(10)は桃茶色を呈し口縁部はゆるやかに内弯したのち端部をまるくおさめる。瓦器碗(11)は内面にやや太目の暗文が数条施される。(12)は烏衾瓦当である。

b 第1層出土の遺物 (図1-13~21、図版12・13)

(13)は中国製染付皿で内面見込に玉取獅子を描く。端反りとなるものである。(14)は常滑の甕で口縁はN字状をなす。土師質皿には中皿(15)と小皿(17~21)があり、中皿は径11cm、小皿は7.5cm前後である。(16)は口縁部が強いヨコナデにより肥厚するタイプである。

c 第2層出土の遺物 (図2-22~29、図版13)

土師質皿は中皿(22~25)と小皿(26・27)があり、このうち(22~24)は白土器である。また(26)は赤橙色を呈し焼成は良好で口縁端部を内側に折り曲げるようにして肥厚さあまり見られないタイプである。(28・29)はともに瓦質のこね鉢で口縁部はナデ調整、体部は横方向のヘラ削りを施す。29は燻し焼成されており黒灰色、28は淡黄茶色を呈す。

d 第3層出土の遺物 (図2-30~60、図3-62~77、図版13・14・15)

土師質皿は白土器(30~34)と赤土器(35~61)に大別される。赤土器はさらに中皿(35~50)と小皿(51~61)に分かれ、中皿は径11cm、小皿は8cm前後を計る。また口縁部の形態からみれば35・38などを代表例とするようにヨコナデによりわずかに外反気味になるタイプと48・49のように内弯気味にゆるやかに立ち上がるタイプがある。小皿は器高1.4cm前後で浅く口縁部はつまみ上げるようにして1回のナデでおさめるものが大半であるが(59・60)のように器高も高く、斜め上方に立ち上がるタイプもみられる。白土器はいずれも中皿でよく水藏された胎土を用いている。土師質土釜(62・63)は、鐙の位置が高く頸部は短い。口縁端部を内側に折り曲げ、上面にわずかな凹をもつ。胎土に少量の砂粒を含む。土鍋(24)は「く」字状に外反した口縁の端部を上方につまみあげる。肩部から体部にかけての器壁は薄く1~2mmほどである。胎土に多量の砂粒を含む。暗赤茶色を呈する。

瓦器 (65～69)

(65・66) は瓦器碗体部片で内面に数条の暗文が施される。(67・68) は底部でともに高台の退化は著しくその痕跡をとどめる程度である。(67) は燻し焼成が不完全で灰白色を呈し硬質である。(69) は小碗で口径6.8cm、器高2.3cmを計る。断面三角形の高台が付く。内外面とも暗文は施されていない。

須恵質鉢 (70～76)

(71・72) は灰白色、他は灰色を呈する。いずれも内外面ともヨコナデ調整を施す。口縁部の形態では玉縁状に肥厚した口縁となるもの(73)や上下に拡張し断面三角形になるもの(74・76)がある。(70)は口縁部のみ自然釉を被り黒色を呈する。すべて東播系の製品である。

国産陶器 (77)

(77) は備前のすり鉢である。斜めに切った平坦な端部は上下にわずかに拡張する。備前焼編年Ⅲa期に該当するものである。内外面ともヨコナデ調整。幅2mmほどのスリ目が入る。

瓦 (78・79)

(78) は軒平瓦瓦当。均整唐草文を配する。凹凸面ともヘラ削りののちナデ調整により平滑に仕上げている。丸瓦瓦当(79)は左巻きの巴文で周囲に22個の小さな珠文を配する。焼成は良好で灰白色を呈する。

e 第4層出土の遺物 (図4—80～90、図版16)

土師質 (80～87)

(80、81、82、85) は白土器の中皿である。このうち(80)の底部は平坦で器壁も薄く口縁は1回のナデによる調整。(82)は白土器の皿としてはめずらしく器壁が厚く口縁部を2回のナデによる調整を施す。(81)はやや小ぶりで灯明皿に用いたものか口縁部に煤の付着がみられる。(83・84)は黄橙色ないしは黄白色を呈する中皿で口縁部は軽いヨコナデのためわずかに外反する。(86)は白土器の小皿である。(87)はやや特異なタイプで貼り付けによる高い高台を有し器壁も厚い。盤もしくは碗となる可能性もある。クサリ礫を多く含む橙色を呈する。

瓦器 (88・89)

(88) は瓦器小皿で口径5.3cmほど、見込み部分の暗文は素略な輪状で、一気に磨かれている。やや厚手である。(89)は前述の(69)と同一タイプ瓦器小碗である。

瓦(90)は軒丸瓦瓦当で左巻きの巴文。周囲に小さな珠文を配する。比較的彫りは深くしつかりとした版である。

f 第5層出土の遺物 (図4—91～98、図版16・17)

土師質 (91～97)

(91～93) は土師質小皿である。橙色ないし黄茶色を呈する。(94～97) は中皿で橙色ないし

は黄白色を呈する。端部のヨコナデが強く外反するもの(92)と、内弯気味に丸く立ち上がるもの(94)、さらにその中間的な様相を示すタイプ(93)がある。

瓦器(99)は推定口径10.5cm。内面やや細目の暗文が数条施される。焼成は良好で硬質である。

g 第7層出土の遺物(図4-99~103、図版17)

(99)は土師質中皿。口縁部は軽いヨコナデを施す。(100~103)は小皿で器高1.5cm未満の浅いものである。(100、102)はクサリ礫を含み赤茶色、他はいずれも灰白色ないしは黄灰色を呈する。

h 第8層出土の遺物(図5-104~117、図版17)

中国製磁器(104)

(104)は白磁の皿で口縁部を欠くが“口禿”となるものである。底部及び体部下半は露胎でこげ茶色を呈する。1228年というメルクマールをもつ根来寺においては同安窯系の皿や青磁劃面文碗などとともに出土例の少ないもののひとつである。

国産陶器(105)

(105)は口径3.9cm、器高0.9cmと非常に小さく口縁部と体部内面に灰釉がかかる。底部はヘラ削り、他はナデ調整を施す。一見ミニチュアの皿のようであるが、おそらく入子となるものであろう。猿投窯、もしくはその周辺の製品と考えるが当遺跡では初めての出土である。

土師質皿(106~113)

(106~110)は土師質の中皿で、このうち(106・107)は底部回転糸切りである。根来寺で出土する土師質皿で糸切りの底部をもつものはきわめて少なく、とりわけ(107)は白土器で糸切りタイプのものであり本例が初めての出土例である。白土器の初現を考える上で貴重な資料といえよう。(111~113)は小皿で黄茶色を呈する。(111)は口縁部を押さえ気味にナデ調整を施す。

瓦器(114~116)

(114~116)はいずれも瓦器碗である。(114)は細目の暗文が見込中央から体部内面にかけて数条施されている。いずれも高台は退化が著しくわずかにその痕跡をとどめる程度であり、終末期の瓦器碗に近い特徴を示す。

瓦(117)

(117)は軒平瓦瓦当で均整唐草文を配し周囲に圈線を巡らす。彫りが深く丁寧で重厚なつくりである。

i 遺構出土の遺物

S D-05(図5-118~124、図版18・19)

(118~121)は土師質中皿である。このうち(118)は白土器で口縁部の強いヨコナデのため体部中央に綾線をもつ。(122)は青磁の双鱼文洗で双鱼文は貼り付けによる。釉は厚く淡青緑色を

呈し、皿付部のみ軸を削り取っている。(123)は備前の壺で口縁は扁平な玉縁状をなす。茶褐色を呈す。(124)は備前の甕、口縁部を外側に折り曲げやや三角形に近い玉縁をなす。口縁部から肩部にかけてはナデ調整。肩部内面は刷毛目調整を施したのちナデ調整を加える。暗灰色を呈す。

S D-09 (図6-125~129、図版19)

(125~127)は土師質中皿。(128~129)は小皿である。このうち(126・127)は口縁部のヨコナデはやや強くわずかに外反するが(125)は丸く内弯気味である。(125・126)は黄白色、他は橙色を呈する。

S V-01 (図6-130~134、図版19)

土師質皿は中皿(130~133)と小皿(134)がある。このうち(130)は口縁部のヨコナデがやや強いものの他は丸く内弯気味におさめるタイプである。橙色ないしは黄茶色を呈する。

S K-01 (図6-135~137、図版19・20)

(135)は口縁の直口する伊万里の碗で体部外面に草花文を描く。いわゆるくらわんか手の碗である。すり鉢(136)はナデ調整を施した口縁部の内側に1本、外側に2本の凹線が巡る。体部はへら削りののちナデ調整を加える。内面は底部まで14本単位のスリ目が施される。赤茶色を呈し、胎土には大粒の石英粒を含む。(140)は丹波焼水甕と思われる。水平に肥厚した口縁部には三条の凹が巡る。内面及び口縁直下までヨコナデ。外面体部は粗い刷毛状工具で轆轤回転により水平方向に調整している。

S K-03 (図6-138~140、図版20)

(138)は小振りの伊万里染付碗で口縁部に葉状文帯を巡らす。皿付部分のみ露胎で赤茶色に発色する。(139)は京焼風の唐津の碗である。艶のある胎釉がかかり暗黄色を呈する。総釉で皿付部のみ軸を削り取っている。全体に細かい貫入が見られる。(140)は備前のすり鉢。

S K-07 (図7-141、図版20)

(141)は瓦質の火舎で口縁部には珠文と唐草文、肩部と体部の境付近に珠文と雷文を配す。唐草及び雷文はスタンプによる施文である。またこれらの装飾を区画するように突帯が巡る。体部は丁寧な磨き調整を施す。

S E-01 (図7-142~146、図8-147~151、図版21)

(142)は(139)と同一タイプの碗で枇杷色を呈し、内面見込に重ね焼きの目跡が3ヶ所残る。全体に細かな貫入が入る。(143~145)は軒平瓦瓦当でそれぞれ巴文、周囲に珠文を配する。

(146)鳥衾で上面は粗いへら削りを施す。(147)は耳付の軒平瓦瓦当。(148~151)は近世の棧瓦である。

2. 第2次調査区の遺物

a 表土・床土出土の遺物

国産陶磁器 (図9-152~156・159、図版22・23)

(152~154)は伊万里染付である。(152)は腰折れぎみの輪花大皿で、内面見込みに草花文が描かれている。(153、154)は碗で、(153)の外面には山水文が、(154)には草花文が描かれている。(155、156)は唐津の碗と鉢であり、(155)は黄褐色の釉が施され、細かい貫入がみられる。内面見込みに胎土目とみられる目跡が3ヵ所認められる。(156)は外反りする口縁をもつ鉢で、体部外面には素地の上から鉄釉で「○」文を描き、その上から明るい青緑色の釉が施されている。体部下半は露胎で、ヘラ削りがおこなわれている。(159)は備前すり鉢で、単位8本のスリ目が引かれている。

中国製磁器 (図9-157・158、図版22)

(157、1001)は貼り付け高台で端反り口縁の白磁皿である。(158、1002、1003)は内面見込みに羯磨文が、体部外面に唐草文を描く染付皿である。

土師質皿 (図9-160~165、図版23)

いずれも小皿である。(160)は焼成が良好で堅くしまった感じで、底部には糸切り痕が残る。(161~163)は口縁部のナデが強いため口唇部が肥厚した、根来寺通有のものである。

b 遺構出土の遺物

SK-02 (図9-166~171、図版23・24)

国産陶磁器 (166~178)

(166)は伊万里青磁碗で、口唇部内面に1条の沈線が巡る。(167)は高く外開きする高台をもつ底の浅い伊万里染付碗である。(168)は口縁端部がやや外反りする碗で、乳白色の釉がかけられ、細かい貫入がみられる。(169)は高台が高く、くすんだ灰色の釉がかけられた碗である。(170)は、備前小形壺の底部である。

土師質皿 (図9-171)

内面に灯芯を置くための断面三角形の貼り付け凸帯をもつ灯明皿で、透明釉が施釉されている。

SK-05 (図10-172~183、図版24・25)

中国製磁器 (172・173)

(172)は口縁部が「く」の字状に強く外反し、端部が稜花になった青磁盤である。(173)は貼り付け高台で、口縁が端反りする白磁皿である。

国産陶器 (174~176)

(174)は肩部で屈曲し、垂直に立ち上がり、再度強く外反りする口縁をもつ美濃瀬戸系の天目茶碗である。(175)は美濃瀬戸系の灰釉皿で、底部見込みに釉着痕がある。(176)は宝珠つま

みをもつ、美濃瀬戸系の小形品の蓋である。底面は糸切りののちヘラ削りがおこなわれている。

土師質皿 (177~180)

(177) はやや内傾ぎみの口縁に2段のナデが施され、端部が丸くおさまられた中皿で、底部に糸切痕がみられる。(180) は指で捻り出して成形したもので、内面と口唇部外面にのみナデ調整がみられる以外は、指成形時の指頭痕が顕著に残る。(178・179) は根来寺通有のタイプである。

軒丸瓦 (182)

左巻き三ツ巴文を内区におき、外区は15個の珠文を巡らしている。

焙烙 (182)

口縁部は内傾し、外面に2段のナデがみられる。底部内面には不定方向へのナデ、同外面は不定方向へのヘラ削りがおこなわれている。

土師質甕 (183)

口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は平らになっている。体部外面は幅の広い叩きが施されたのち、ヘラ磨きがおこなわれている。頸部にかぎり一段のヘラ削りがおこなわれている。内面は左下がりの櫛による調整が施されている。

S K-06 (図11-184~188、図版25)

国産陶器 (184)

褐色の釉がかけられた唐津系坏である。体部下半は露胎でヘラ削りされている。高台は削り出しである。

土師器皿 (185)

口縁部のナデが弱く、端部が丸くおさまられた小皿である。

瓦 (186~188、1004)

(1004) は瓦当にシャープな下り藤と思われる文様を置き、幅が広く高い周縁をもつ軒丸瓦である。軒平瓦には、水切り用の耳がつくもの(186、187、1005)とつかないもの(188)とがある。瓦当文様は、いずれも均整唐草文である。

S K-09 (図11-189・190、図版26)

(189) は、体部外面に草花文をもつ伊万里染付碗である。(190) は、口縁部内面に粘土粒を貼り付け、透明釉をかけた土師質皿である。口唇部にタールの付着が認められる。

S K-10 (図11-13-191~207、図版26~28)

陶磁器 (191~196)

(191・192) は伊万里染付青磁碗である。(191) は口縁部内面に細かい四方櫛が、見込みには2条の圏線内に草花文が、(192) は口縁部内面に粗い四方櫛が、見込みには2条の圏線内に蕉

が対で描かれている。両者とも漆継ぎの痕跡が残る。(193)は唐津碗で、内面見込みに蛇目軸ハギがみられる。(194・195)はいずれも唐津皿で、口縁が直口するもの(194)と屈曲するもの(195)とがある。(196)は高台を削り出した中国製の天目茶碗である。

土師器皿(197)

口縁部のナデにより端部が肥厚した中皿である。

瓦(198~203・205)

いずれも瓦当内区に三ツ巴文を、外区に珠文を配する軒丸瓦である。(198)の丸瓦部凸面は、ナデ整形ののち縦方向のヘラナデが施されている。凹面には叩板の条痕が顕著に残る。(200)は鳥舎で、瓦当文様は左巻き三ツ巴文と24個の珠文の組み合わせである。巴文の頭は丸く、尾部へ向い緩やかに低くなる。尾端は前者の尾の中央部に重なる。珠文は小さく、先は尖りぎみである。周縁はやや広く、高い。(201)は、中心に花冠文を、その左右に均整唐草文を配した軒平瓦で、周縁の左右の幅は広い。(202)は丸瓦で、凸面はナデ整形ののち縦方向にヘラナデ調整がおこなわれている。凹面はコビキされているが、一部に布目が残る。玉縁部はナデ整形がおこなわれている。(203)は平瓦で、凹凸両面ともナデ整形をおこなっている。(205)は雁振で、凸面は丁寧なナデが施され、凹面は左下方へコビキされているが部分的に布目痕が残る。玉縁部が重なる部分はヘラ切りによる面取りがおこなわれている。

瓦製円筒管(204)

差し込みにして使用するため、先端が細くなるように作られている。内面は中央部に紐痕がめぐり、全面に布目痕が残る。外面は丁寧なナデが施されている。輪積みで作られており、先端の細い部分はあとから接合されている。両端とも内面はヘラ切りされているが、後端は差し込みの重なりが大きくなるようヘラ切りの幅が大きい。

茶臼(206・207)

いずれも和泉砂岩製で、セットになると思われる。スリ目は上臼(206)が10~12本、下臼が9~12本で一単位となり、いずれも計8単位で構成されている。上臼には引き手がセットされる柄の部分に、菱形の装飾が造り出されている。

SK-11(図15-208~210、図版28)

(208)は志野の筒茶碗で、体部に釉を掛けた時の指跡が2ヵ所認められる。高台は削り出しで、高台内に3ヵ所の目跡がある。(209)は内面見込みに羯磨文をもつ中国製の染付皿である。(210)は根来寺通有の土師質皿である。

SK-12(図15-211~213、図版28)

(211)は美濃瀬戸系天目茶碗の底部である。高台は削り出しである。(212)は内外面とも器壁が荒れているため観察は不能であるが、(183)と同様であろうと考えられる。(213)は指で

捻り出して成形した土師器皿で、指頭痕はナデにより平滑化されている。

S K—14 (図15—214・215、図版29)

(214) は伊万里染付碗である。(215) は瓦製こね鉢で、内面は横方向へのナデのあとスリ目が施されている。口縁部は上下にやや拡張され、ナデで仕上げている。体部外面は横方向と縦方向へのヘラ削りがおこなわれている。

S K—15 (図15—216～221、図版29)

陶磁器 (216～218)

(216) は「T」字状口縁の唐津刷毛目薬である。頸部と体部は櫛波状文を施したのち施輪している。(217) は伊万里染付碗で高台と体部下端に1条の圈線が巡る。内底見込みに蛇目軸ハギがみられる。(218) はヘラ描き蓮弁文をもつ中国製青磁碗である。剣頭は蓮弁を意識せず付されている。

土師質皿 (219～221)

口縁部の強いナデにより、口縁端部が肥厚した根来寺通有の小皿である。

S K—16 (図15—222～225)

(222) は唐津皿である。口縁部は体部から「く」の字状に強く外反し、端部は上方につまみ上げられている。

内面は釉が刷毛塗りされている。内面見込みに7ヵ所の目跡があり、高台髷付にも目跡を打ち欠いてはずした跡が7ヵ所みられる。

S K—18 (図16—226・227、図版30)

(226) は瓦当内区に左巻三ツ巴文、外区に珠文を配する軒丸瓦である。凹面に布目が残り、他の調整は加えられていない。(227) は根来寺通有の土師器小皿である。

S K—19 (図16・17—228～229、図版30)

(228) は、口縁部が体部から「く」の字状に強く外反し、端部を上方につまみ上げている。内面にはヘラ描きの牡丹と垣根と思われる文様が彫られており、その上から濁った乳白色の釉がかけられている。(229) は焙烙である。

S K—20 (図17—230～235、図版30)

(230) は伊万里高脚染付坏である。底部外面は糸切りののち、ヘラ削りで低い高台を作り出している。(231) は口縁がやや外反する碗で、乳白色の釉が施釉されている。高台は削り出しで、畳付部に3ヵ所の目跡が認められる。(232) は碁笥底の中国製染付皿で、体部外面下半に蕉葉文帯を巡らす。全面に施釉後畳付部の釉を削り取っている。(233・234) は土師器皿である。(233) は大皿で、体部外面の指押えが強く、口縁端部のナデが外方に強いため尖りぎみである。(234) は根来寺通有のタイプの小皿である。(235) は備前水指である。底部から体部中央まで

は垂直に立ち上がり、体部中央から口縁端までが緩やかに外反する。口縁部はナデ、裾廻りはヘラ削りで仕上げられている。底部中央に「二」の窯印がヘラ彫りされている。

S K-32 (図17-236、図版31)

体部に丸味をもち、口縁部がやや内傾する備前水指である。体部外面と底部外面に緋摩がみられる。底部に「久」の窯印がヘラ彫りされている。

S K-36 (図17-237~244、図版31)

(237) は口縁部が外反りし、貼り付け高台をもつ中国製白磁皿である。(238~244) はいずれも根来寺通有タイプの土師質小皿である。

S G-01 (図18-20-245~273、図版31~34・37-1019-1025)

陶磁器 (245~262)

(245) は暗緑色の釉調を呈する中国製青磁鉢で、内面見込みに草花文が型押しされている。全面に施釉後高台内を蛇目軸ハギしている。(246) は淡い青色の釉調を呈する伊万里青磁三足盤である。(247) は伊万里青磁三足香炉である。高台部の軸は削り取っている。(248) は伊万里染付高脚環である。(249・250) は伊万里白磁環で、いずれも口縁は端反りする。(251~253) は京焼碗である。(251) は口径が大きい割に浅く内面見込に山水文が描かれている。(253) は体部外面に菊花が描かれている。(252・254~256) はいずれも唐津碗である。体部がやや丸味をもつもの(251・256)と、体部が高台部から口縁端部まで直線的に開くもの(245・255)とがある。いずれも高台台付部の軸は拭き取られている。(255)の内面見込みには3ヵ所の目跡が残る。(256)は体部外面下半がヘラ削りされ、上半はカンナ様のもので削られている。(257)は体部が底部からほぼ直線的に開き、先端をつまみ上げ口縁端としている。底部は円形にヘラで削り貫かれている。内外面とも泥粧が刷毛塗りされている。胎土は赤褐色を呈し、ザックリした感じである。(258)は丸味をもって立ち上がった体部を「く」の字状に折り曲げ口縁とした鉢で黄白色の釉が施軸されている。胎土は緻密で釉より多少明るい色調である。(259)は体部から「く」の字状に外反させ口縁部とし、端部を内側に折り曲げたもので、黒褐色の釉がかけられている。(260)は口縁端部を平らにした「T」字状の口縁を襲で、茶褐色の釉の上から黒色の釉が体部に3ヵ所かけられている。底部内面に5ヵ所の目跡が残る。(261)は備前徳利で体部上半にはカンナによる沈線が施されている。底部外面に「〇」の窯印が押されている。(262)上方につまみ上げられると同時に下方に拡張された口縁をもつ備前すり鉢である。体部内面には単位9本のスリ目が全面に、底部内面には同一の櫛によるスリ目が「⊕」状に引かれている。

土師質土器 (263~271)

(263) は中皿で、底部の糸切り以外は丁寧なナデで仕上げられている。(264~268) は小皿で、

指頭痕が顕著に残るもの(264・265)と、ナデにより指頭痕を平滑化したもの(266~268)とがある。(269)は尖底の土器で、外面器表は剥落しているため整形痕は不明であるが、内面下半には強い指押えの跡が残る。上半は縦方向のナデで平滑化している。(270)は鍋、(271)は焙烙である。

瓦(272・273)

いずれも左巻き巴文軒丸瓦であるが、珠文を配するもの(273)と、珠文が無いもの(272)とがある。

木製品(1019~1025)

(1019)は丸箸である。(1020)は蒸籠の底板と思われるが、後に再利用されたようである。(1021)は大形の鉢である。漆を塗った痕跡はない。(1022)は柄杓である。(1023~1025)は釣瓶であるが、上下端に竹を編んだ籠をはめたもの(1023・1024)とその中間にもう1本の籠をはめたもの(1025)とがある。

SD-03(図21-274、図版35)

体部外面に草花文をもつ伊万里染付碗である。内面見込みに蛇目軸ハギがみられる。

SD-04(図21-275、図版35)

体部下半が露胎で、削り出し高台の唐津碗である。暗緑色の釉がかけられている。

SX-01(図21-276~278、図版35)

(276)は、体部下半が露胎で削り出し高台の唐津碗である。(277・278)は外反りする口縁の中国製白磁皿である。(278)の高台は貼り付けである。

SE-01(図21-279・280、図版35・36-1010~1018)

(279・280)は体部外面に草花文をもつ伊万里染付碗である。(1010)はSE-01本体に使用されていた二石入りの備前大甕である。(1011)は庖丁、(1012)は丸箸、(1013)は竹筴である。柄の部分に2条の線刻がみられる。(1014)は杓文字で、内外両面ともノミの跡が残る。

(1015)は棕櫚紐である。結び目のあるものも出土している。(1016)は竹の節の内面を削り継ぎ手としたものである。(1017)は両端を削った槍である。(1018)は、おそらく庖丁の柄になると思われる。中央に一ヵ所目釘穴が貫通している。

埋甕-01(図21-280、図版35)

三足が付く土師質甕である。円板上に粘土帯を指押さえしながら積んで成形したもので、内面は指跡が顕著である。外面は横ナデののち13本の凸帯を貼り付けている。

瓦列に使用された瓦(第13図 図版35-1008・1009)

総数65枚が出土したがいずれも両端に水切りが付く平瓦で、次の2種に大別できる。狭辺裏面両端に打ち欠いた跡のあるものとなないもの、縦方向に反りのあるものとなないものがある。

3 第3次調査区の遺物

a 包含層出土の遺物 (図22、23、24—282～327、図版38～41)

伊万里系磁器 (282～293)

(282) は染付碗。体部外面に簡略された草花文を描く。(283) の軸はやや灰色味を帯び細かな気泡が目立つ。見込中央に素略な五弁花と思われる文様が描かれる。(284) も染付の碗で体部に図案化された鳥(雀?)と稲束がセットとして描かれる。呉須の発色は良く明るい。(285) は見込と高台付近に圏線が巡る。費付部に砂の付着を認める。以上の碗は高台が高いことが特徴としてあげられ文様その他からも天明以後、日常雑器として広く流通した² 広東碗。と称される一群に該当するものであろう。

(287) は染付青磁で見込中央には一見コンニャク判風の筆描きによる五弁花が描かれている。高台内部に「渦福」字銘。(288) は筒型の染付碗で草花文を描く。(289) は染付の皿である。

(290) は波縁皿で見込部分には雲堂文を描く。口唇部は口銹となっている。(291) は丸く立ち上り内湾する皿で体部内面に素略な半菊文を描く。(292) は白磁の壺で内面は回転ナデ、外面には轆轤回転によるヘラ削り痕が線刻となって残る。軸はやや灰色味を帯びる。(293) は白磁坏である。

唐津系陶器 (294～301)

(294) は褐釉の碗か。高台及び高台付近は露胎となっている。(295) は軟質の小坏である。白濁色の釉がわずかに残るが剝離が著しく詳細については不明。(296) はやや扁平な玉縁状の口縁をもち深鉢、もしくは片口となるものである。薄い白濁釉がかかる。(297) は白濁釉の上に銅緑釉を流しがけしたいわゆる唐津二彩と称されるもので端折の盤となるものであろう。(298) も盤で内面は刷毛目、外面底部付近に鉄釉による圏線が巡る。(299) は皿で暗草緑色の釉。胎土目痕が残る。(300) は褐釉の小壺もしくは小坏となるものである。底部は露胎で糸切底である。

(301) は体部下半まで暗草緑色の釉のかかった壺で胴部中央に3mmほどの沈線が6本(以上)めぐる。半磁器質である。

国産陶器 (302～313)

(302) は美濃の灰釉皿である。体部内面には丸ノミによる花卉状の彫りが施され軸は厚く、高台付近ではガラス質を呈す。全体に粗い貫入が入る。(303) は美濃瀬戸系の灰釉の鉢。(304) は備前のすり鉢である。内外面とも赤茶色を呈しスリ目は同心円状に7～8本施したのちたて方向のスリ目を施す。(385～309) はいずれも備前のすり鉢口縁部。このうち(208) は体部外面をヘラ削りにより調整する。また(309) はやや小振りのすり鉢で口縁端部は肥厚せずわずかにつまみあげ、ナデにより処理している。(400) はすり鉢と同じつくりであるがスリ目は施されていない。(311) は備前の水差しである。暗茶褐色を呈する。

(312)は備前大甕の口縁部で端部を欠くが備前焼編年Ⅳ期のものと考えられる。肩部には胡麻と称される自然軸が被る。(313)は備前壺の口縁部で頸部に一条の沈線が巡る。

中国製磁器 (314~317)

(314、315)は白磁の皿である。314の軸は透明度を欠き、小孔、軸切れが目立つなどやや粗雑である。(316)は白磁の碁笥底の皿である。(317)は染付の碁笥底の皿である。外面体部に蕉葉文、口縁部に硬化した波濤文を巡らし、内面見込には草花文を描く。

土師質土器 (318~324)

(318)は高い高台を有し、壺となるものか。外面は磨き、内面は粗いナデ調整。内面のみ火を受けた痕跡があることから火消壺として使用されていた可能性も考えられよう。(320)は大ぶりの鉢である。口縁部に一条の突帯がめぐり、内面はナデ、外面はいいいな磨きが施される。(321)は甕もしくは火舎類の底部となるものと思われる。砂粒を多く含み胎土は粗い。(322~324)は土師質小皿でいずれも口縁部は強いナデにより肥厚する。

b 遺構出土の遺物 (図24、25-328~346、図版41・42)

SK-04 (328)は美濃瀬戸系の天目茶碗。胎土は黄白色でザックリとした土である。

SD-01 (329)は土師質小皿で強いヨコナデにより口縁部は肥厚する。クサリ礫を含み橙色を呈する。

SK-05 (333~335)

(333)は唐津焼で盤となるものか。無軸で高台は高く、荒い袈りにより4分割する。(334)は土師質の甕である。内面には粗い刷毛目、外面肩部にはタタキ目が残る。(335)は備前のすり鉢で内面には10本単位の細いスリ目が施されている。

SK-10 (336~337)

(336)は唐津の皿で草緑色を呈す。体部下半は露胎となる。(337)は土師質小皿。

SK-11 (338)

(338)は伊万里の染付皿で内面に草花文を描く。呉須の発色は良く明るい。

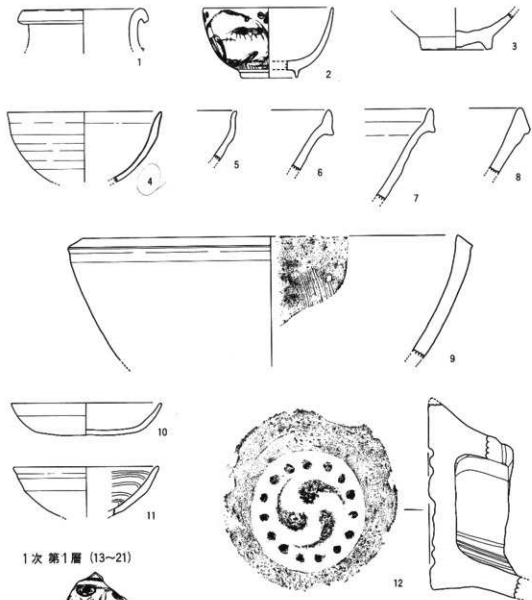
甕・手水鉢出土の遺物 (339、340、341、1027、1028)

(339)は伊万里の碗で口縁は玉縁状となる。(340)も伊万里の碗で割り筆による二重の欄目文が描かれる。

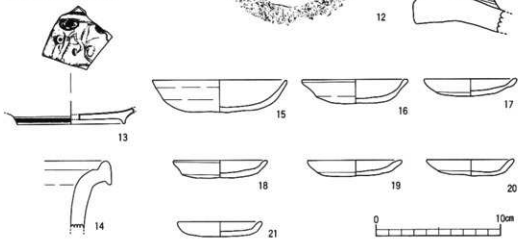
甕 (1027)は口径37cm、器高41cmを計る。口縁端部は水平方向に肥厚し2本の浅い凹線がめぐり、肩部には1cm間隔で6本の浅い凹線がめぐらされる。体部内面には格子状タタキ痕が残る。また内面底部には絞りが認められる。手水鉢 (1028)は砂岩製で口径33cm、深さ21cmを計り、外面は荒く打ち欠いたままの状態である。

1次 表土・床土 (1~12)

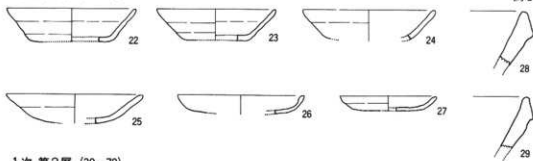
图1



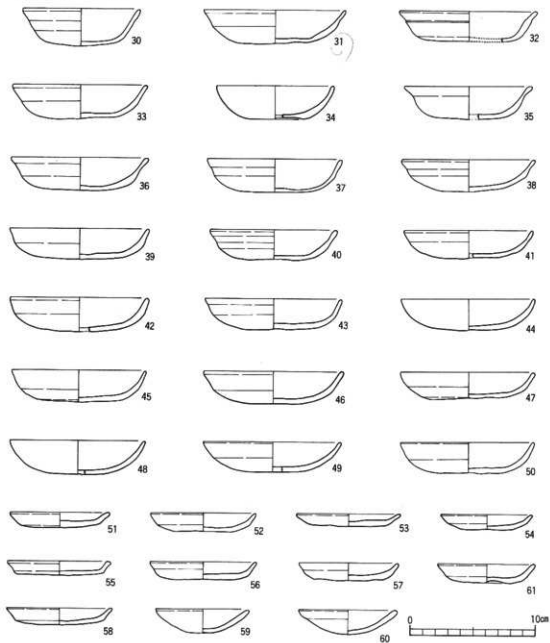
1次 第1層 (13~21)

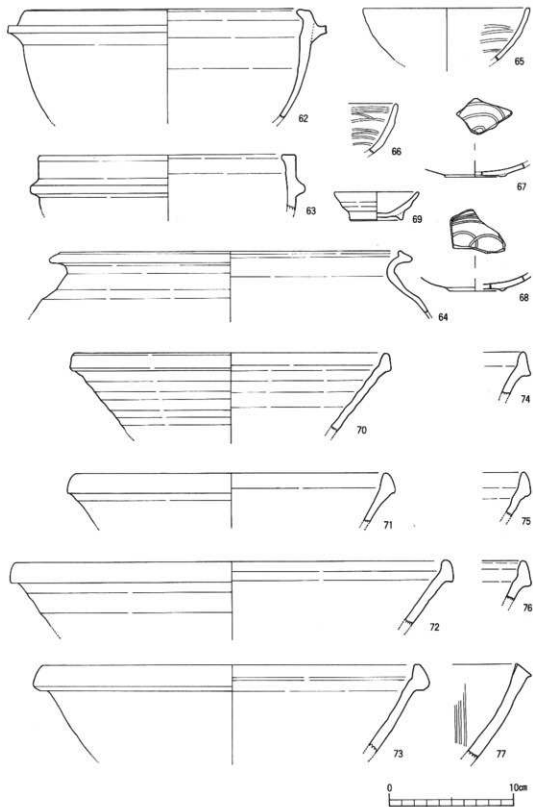


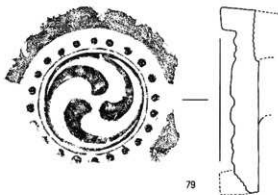
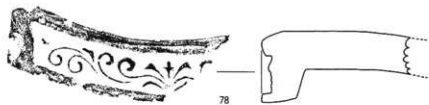
1次 第2層 (22~29)



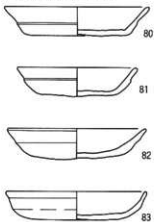
1次 第3層 (30~79)







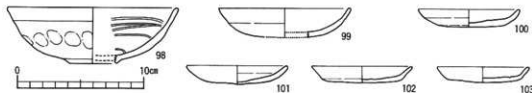
1次 第4層 (80~90)



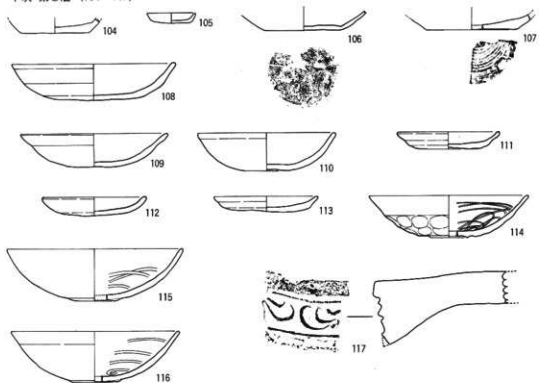
1次 第5層 (91~98)



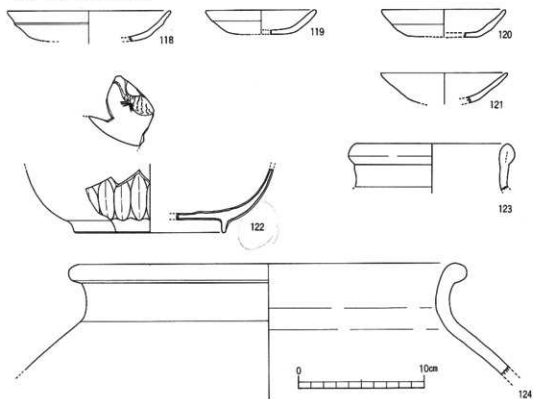
1次 第7層 (99~103)



1次 第8層 (104~117)

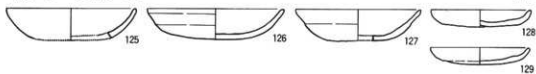


1次 SD-05 (118~124)

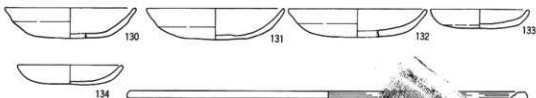


1次 S D-09 (125~129)

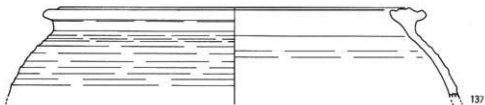
図 6



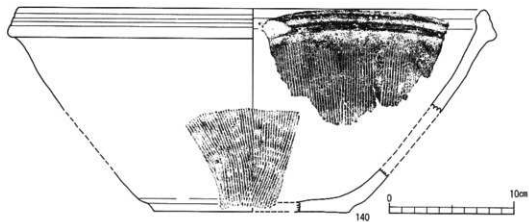
1次 S V-01 (130~134)



1次 S K-01 (135~137)

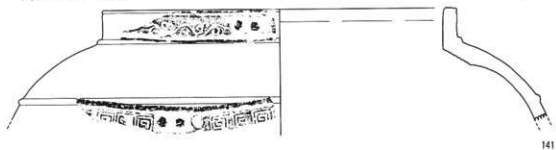


1次 S K-03 (138~140)



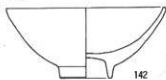
1次 SK-07 (141)

图 7

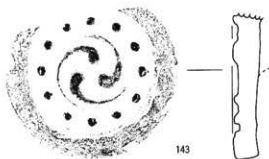


141

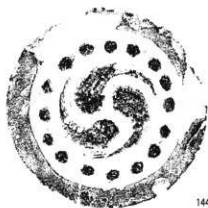
1次 SE-01 (142~151)



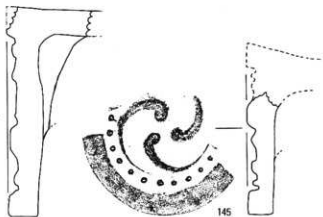
142



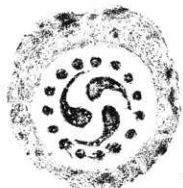
143



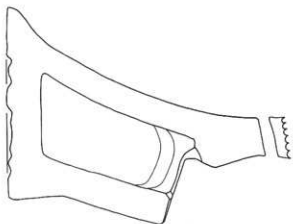
144

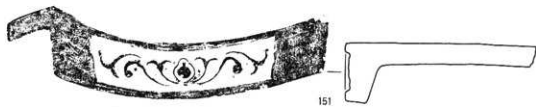
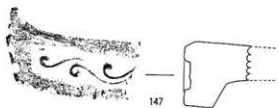


145



146

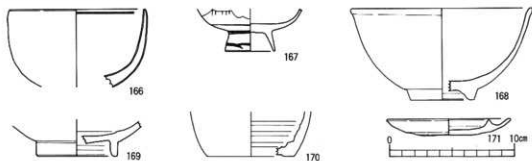




2次 表土・床土 (152~165)

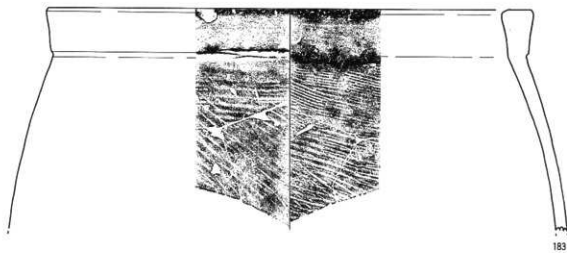
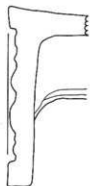


2次 SK-02 (166~171)



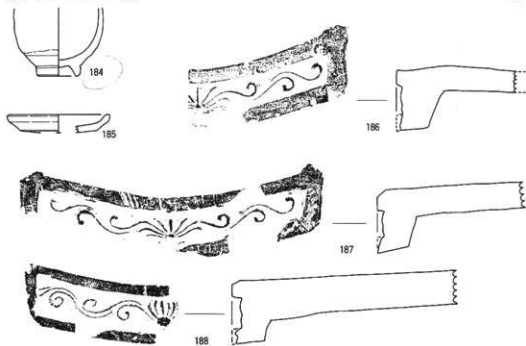
2次 SK-05 (172~183)

図10



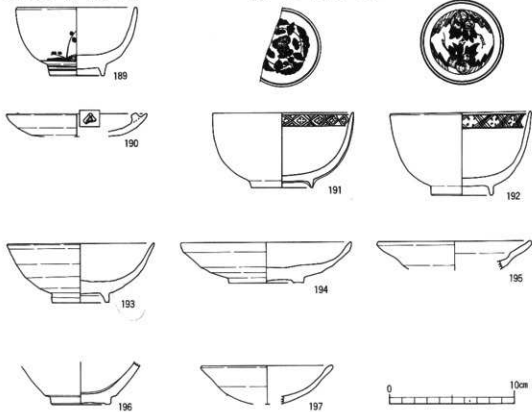
2次 SK-06 (184~188)

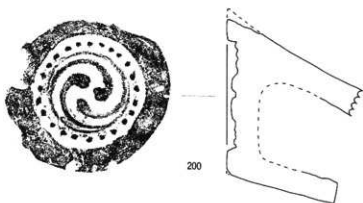
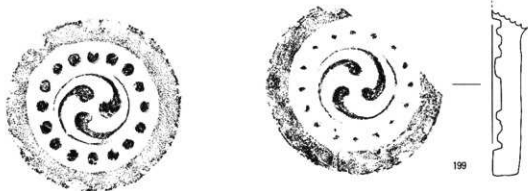
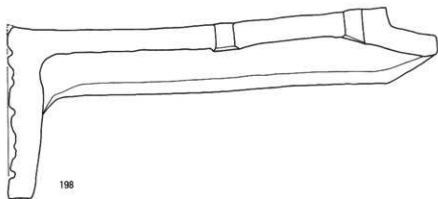
图11

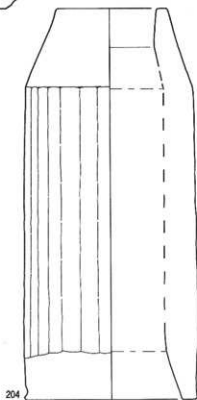
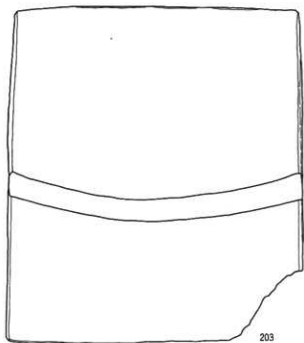
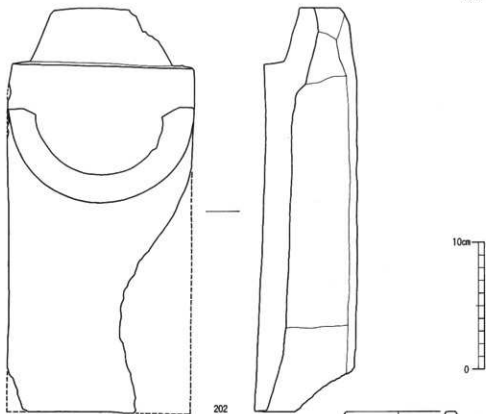


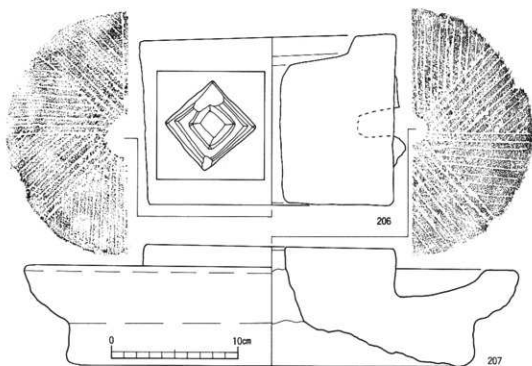
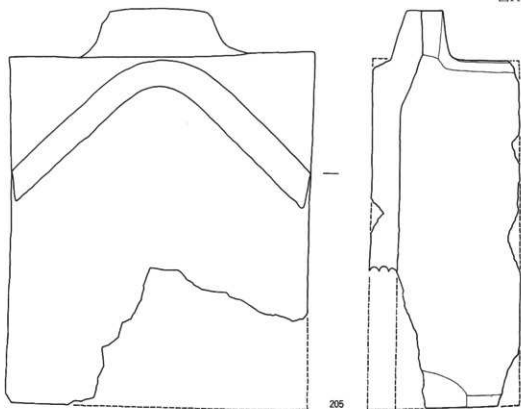
2次 SK-09 (189~190)

2次 SK-10 (191~207)

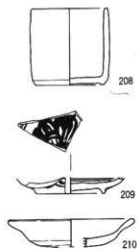




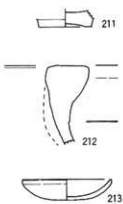




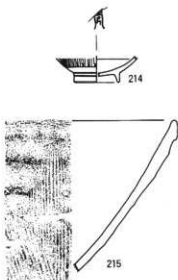
2次 SK-11 (208~210)



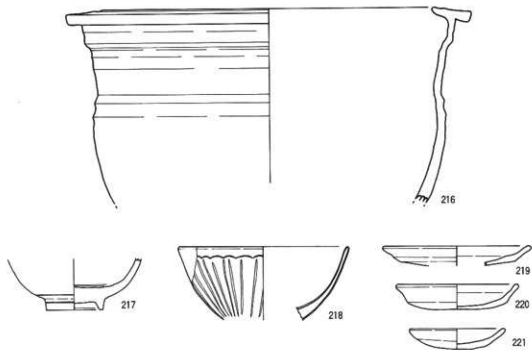
2次 SK-12 (211~213)



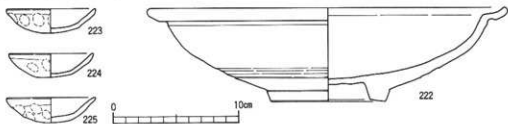
2次 SK-14 (214・215) 图15



2次 SK-15 (216~221)

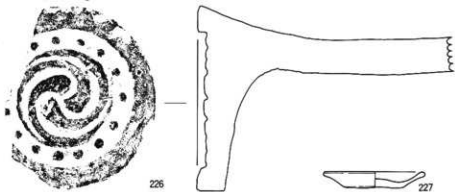


2次 SK-16 (222~225)

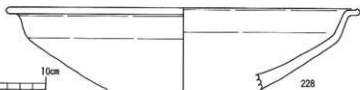
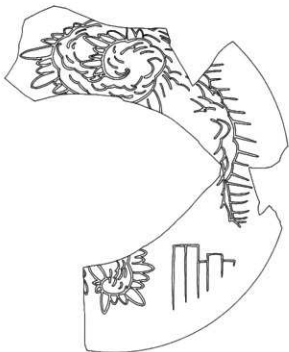


2次 SK-18 (226・227)

图16



2次 SK-19 (228・229)





229

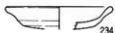
2次 SK-20 (230~235)



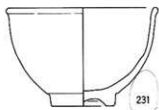
230



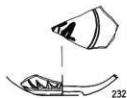
233



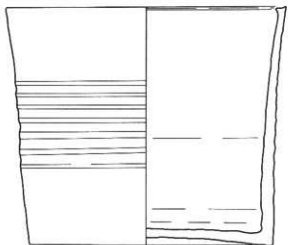
234



231

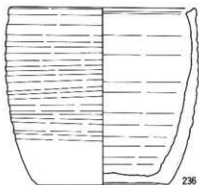


232



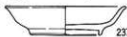
235

2次 SK-32 (236)

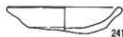


236

2次 SK-36 (237~244)



237



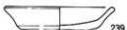
241



238



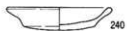
242



239



243

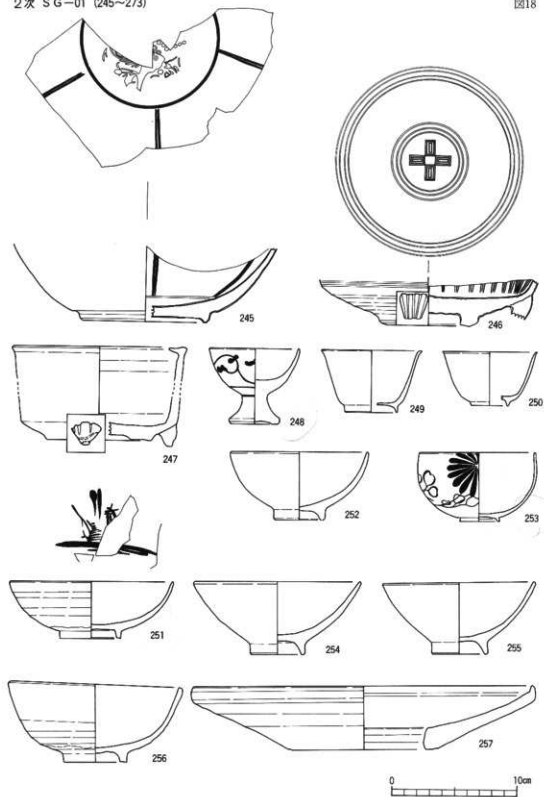


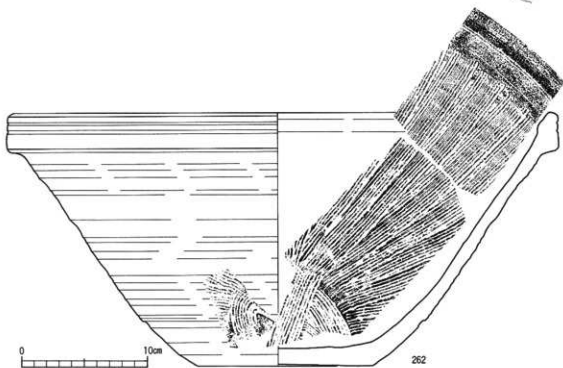
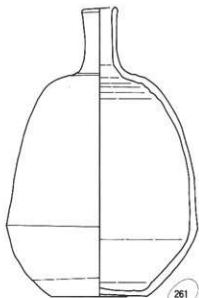
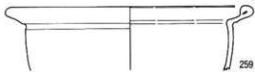
240

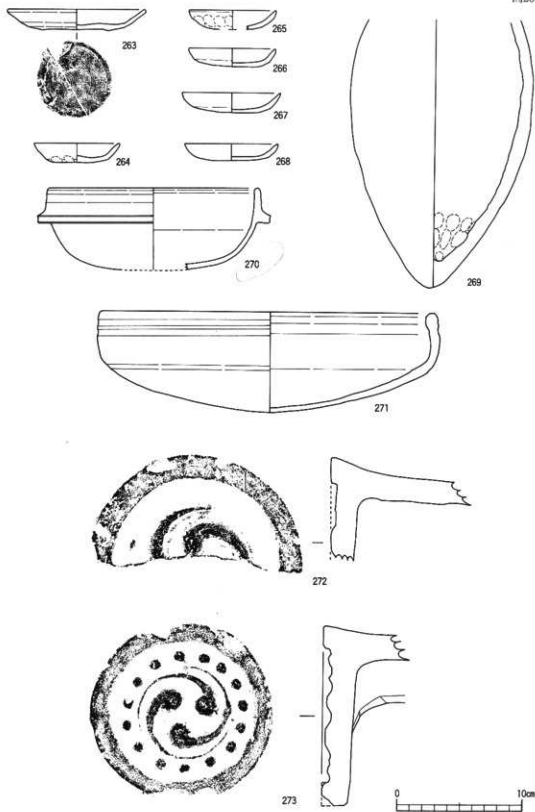


244







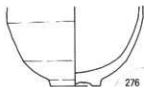


2次 SD-03 (274)



274

2次 SX-01 (276~278)



276

2次 SE-01 (279・280)

図21



279

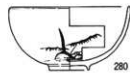
2次 SD-04 (275)



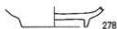
275



277

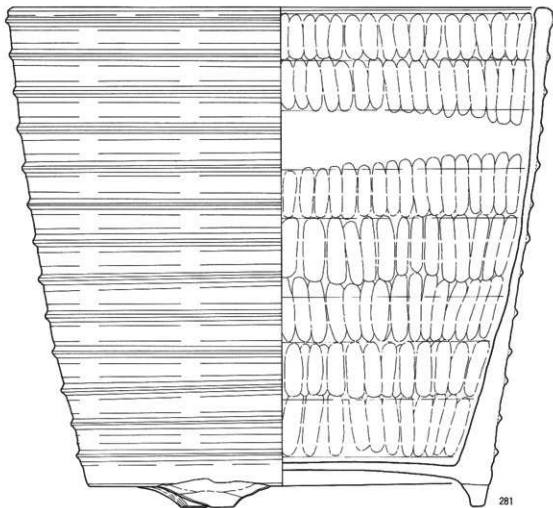


280



278

2次 ウメガメ-03 (281)

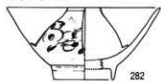


281



3次 包含層 (282~327)

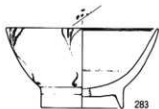
图22



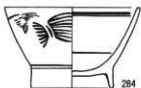
282



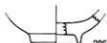
285



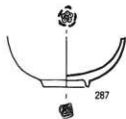
283



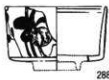
284



286



287



288



289



+



291



+



292



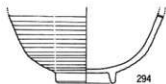
290



291



293



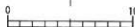
294

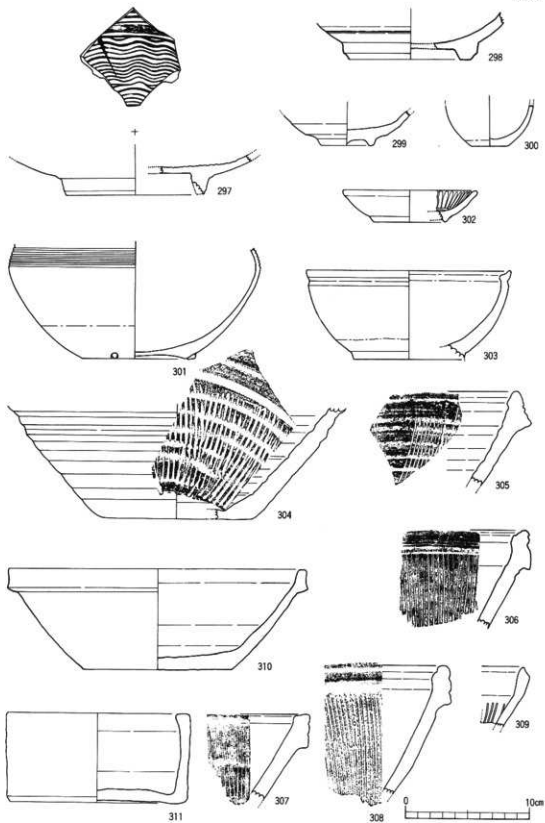


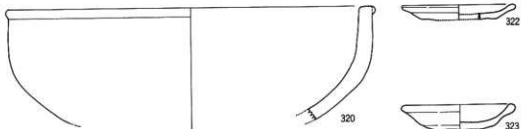
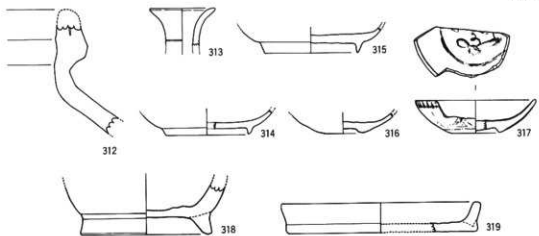
295



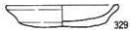
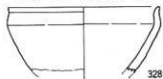
296



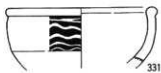




3次 SK-04 (328・329)

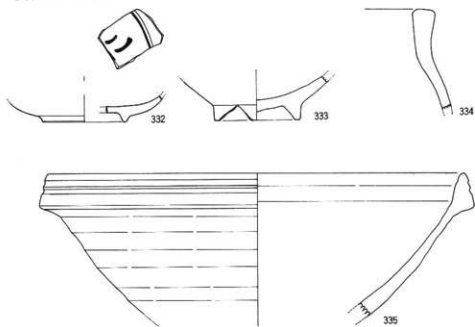


3次 SD-01 (331)

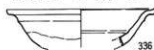


3次 SK-05 (332~335)

図25



3次 SK-10 (336・337)



3次 SK-11 (338)



3次 壺・手水鉢 (339~341)

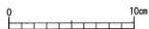
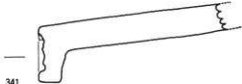
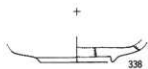
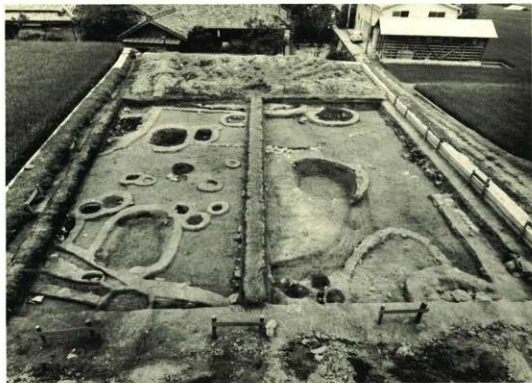


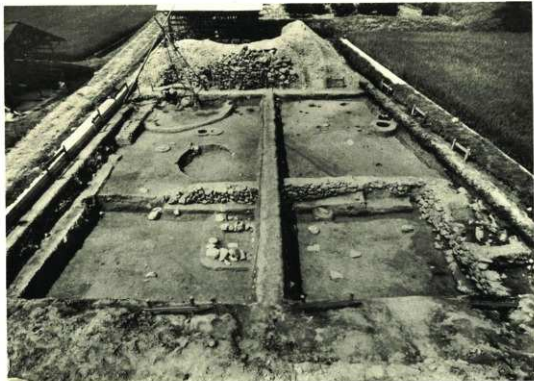
圖 版



1 1次 上層全景 (北から)



2 1次 SE-01 (南から)



1 1次 中層全景 (南から)



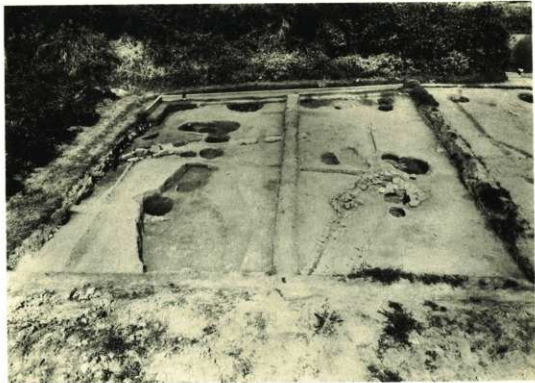
2 1次 中層全景 (北から)



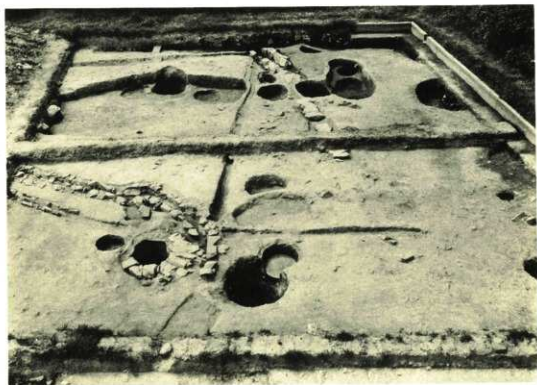
1 1次 SX-01 (南から)



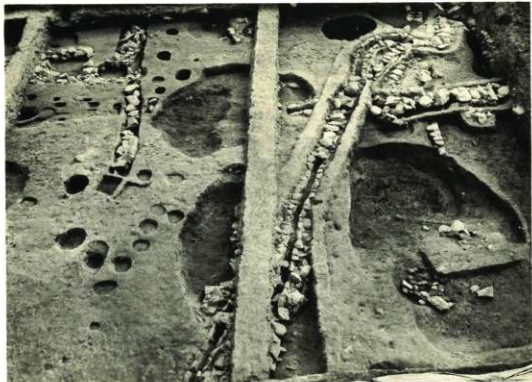
2 1次 下層全景 (南から)



1 2次 西半部北側全景(南から)



2 2次 西半部北側全景(東から)



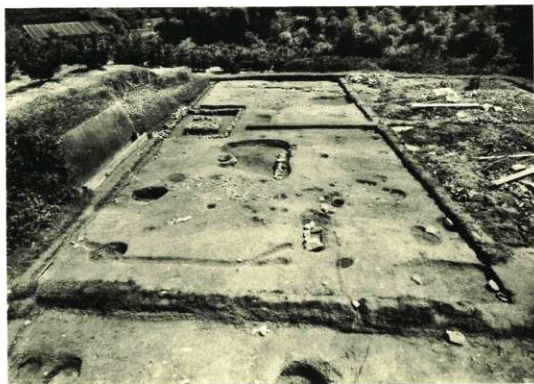
1 2次 西半部南側全景(北から)



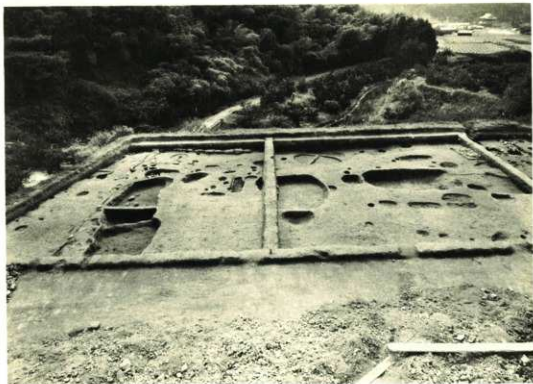
2 2次 西半部南側全景(東から)



1 2次 東半部北側全景 (南から)



2 2次 東半部北側全景 (西から)



1 2次 東半部南側全景（北から）



2 2次 東半部南側全景（西から）



1 2次 SE-01・SD-02 (西から)



2 2次 SE-01・SD-02・SD-03 (東から)



1 2次 SG-01 (西から)



2 2次 SX-02 (北から)



3 2次 埋桶-02 (北から)



4 2次 竹桶-01 (西から)



5 2次 石列 (北から)



6 2次 石列 (西から)



1 2次 ウメガメ-02 (北から)



2 2次 ウメガメ-02断面 (東から)



3 2次 SX-01 (南から)



4 2次 SX-03・04 (北から)



5 2次 瓦列 (南から)



6 2次 瓦列立面 (南から)



1 3次 上層全景 (南から)



2 3次 上層南半部全景 (南から)



3 3次 上層東半部 (南から)



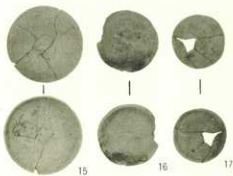
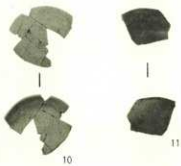
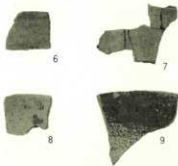
4 3次 手水鉢・埋壺検出状況 (東から)



5 3次 SF-01 (北から)



6 3次 下層全景 (南から)





18



19



22



23



24



20



21



25



26



27



28



29



31



33



30



32



34



35



37



36



38



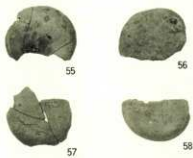
39



41



42





64



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



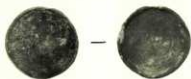
77



78



79



88

89

90

91

92

93

94



95



97



96



98



100

101



102

103



99



104



105



106



107



109



108



110



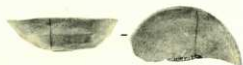
111



112



113



114



115



116



117



118



120



119



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



137



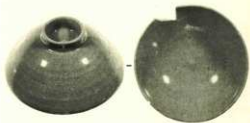
138



139



140



142



141



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



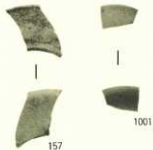
154



155



156



157

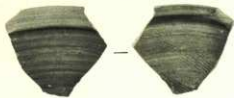
1001



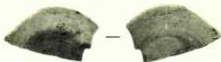
158

1002

1003



159



160



—



161



162



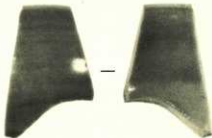
163



164



165



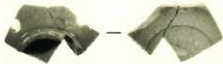
166



167



168



169



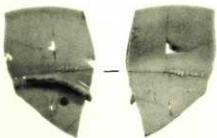
170



171



172



173



174



175



176



177



178



179



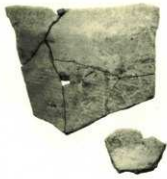
180



181



182



183



184



185



1004



186



1005



187



188



189



190



191



192



193



194



195



196



197



198



199



200



201



202



203



204



205



206



207



208



209



210



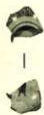
211



212



213



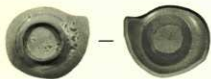
214



215



216



217



218



220

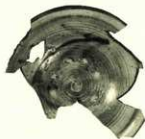
221



223

224

225



222



226



227



228



229



230



231



232



233



234



235



236



237



238



240



239



241



242



243



244



245



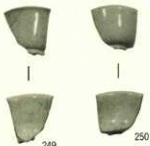
246



247



248



249

250



251



252



253



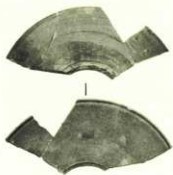
254



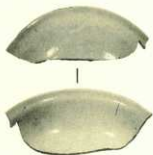
255



256



257



258



259



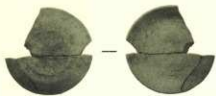
260



261



262



263



264



1006



265



1007



266



267



268



269



270



271



272



273



274



275



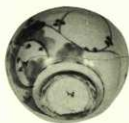
276



277



278



279



280



281



1008



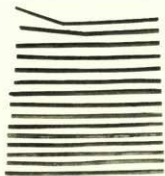
1009



1010



1011



1012



1013



1014



1015



1016



1017



1018



1019



1020



—



1021



1022



1023



1024



1025



262



263



264



285



286



287



288



290



291



289



292



293



294



296



297



298



295





299



300



302



303



301



304



305

306

307



309

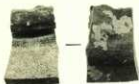
308



310



311



312



313



314



315



316



317



318



320



319



321



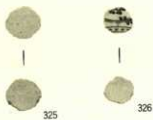
323



322



324

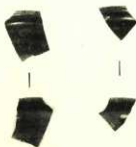


325

326



327



328



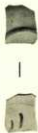
329



331



333



332



334



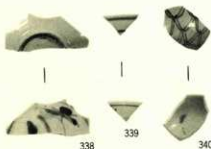
336



337



335



341



1026



1027



1028

昭和59年度
根来寺坊院跡

編集 和歌山県教育委員会
発行 和歌山県教育委員会
印刷 真 陽 社